

田園環境都市パイロット版調査業務・報告書

小山市生井地区 持続可能なまちづくりに向けた地域調査

基礎資料



2022年3月

小山市

小山市生井地区 持続可能なまちづくりに向けた地域調査 基礎資料

目次

I 調査の趣旨と調査概要 ……	1
1 目的	
2 本調査の「風土性調査」としての性格付け	
3 地域での各種調査	
4 先進地調査 ……	2
5 調査中間報告	
6 「田園環境都市小山」基礎資料パイロット版の作成	
II 踏査および文献調査による報告 ……	3
1 地域の自然について	
2 地域の自然への人の働きかけについて ……	8
3 地域と人の心身の結びつき ……	16
4 景観から読みとれるその他のこと ……	21
III 簡易社会調査による報告 ……	23
1 目的と実施概要	
2 結果整理の手法について ……	24
3 各調査の結果報告 ……	25
3_1 グループインタビューの記録（概要版）	
3_2 アンケートと調査結果（概要版） ……	45
3_3 個別聞き取りの記録 ……	52
4 調査結果の再整理と考察 ……	55
4-1 調査結果の再整理：キーワード抽出	
4-2 資料：小山市地域別世帯数と人口の増減 ……	59
4-3 調査結果の再整理：テーマ別のまとめ ……	60
4-4 持続可能な田園環境都市ビジョンへの手がかり ……	65
IV 結び ……	67
1 調査について	
2 結果	
3 考察	
4 課題 ……	68
参考・引用文献 ……	69

I 調査の趣旨と調査概要

1 目的

小山市では、生態系の頂点に立つコウノトリが定着・繁殖するラムサール条約湿地「渡良瀬遊水地」を擁する、都市と田園環境が調和したまちとして、小山市の現在の環境を将来にわたり維持向上させていくため、これからのまちづくりを「田園環境都市 小山」と呼び、SDGs の実践と一体化したまちづくりに取り組もうとしている。

本調査は、上記背景を踏まえて、現地調査（踏査）、地域の聞き取り調査、文献調査を実施して基礎資料を作成し、小山市における持続可能な社会実現に向けた「田園環境都市 小山」を具現化させるとともに、市民・企業・市民団体・行政など各主体に「田園環境都市 小山」を浸透させて各種取組みの深化を図るものである。

2 本調査の「風土調査」としての性格付け

本調査は、地域の風土性（風土の性質、成り立ち）に着目して行った。「気候風土」から「企業風土」まで、人々になじみのある風土は、地域の自然に人間が暮らしと生業を通して働きかけてかたちづくられる（詳細はII章を参照）。

こうした風土の調査は、地域に暮らす市民とともに地域の自然と人間の関係のこれまでを知ることにつながる。そして、そこから地域の持続可能なあり方を考えてゆくことが可能となる。また、ある専門分野の中で行われる地域研究とは違い、調べる対象は自然から社会、文化まで幅広く、それら風土の要素を分析し、要素間の関係を調べた結果を総合・統合することで風土の成り立ちが読

み解けてゆくため、地域の実像を浮かび上がらせることに結びつき得る。

このように、持続可能なまちづくりに市民と行政が共同で取り組む際に依って立つ基盤と考えられる風土性調査として、本調査は実施することとした。

3 地域での各種調査

踏査（現地調査）、簡易社会調査2種（聞き取り調査、アンケート調査）、文献調査を組み合わせで行った。以下は、その概要である。

3-1 踏査

小山市生井地区及びラムサール条約湿地「渡良瀬遊水地」周辺について、小山市担当者と地理・地形の確認を行った。以降、他の調査から得られた情報に関する現地での確認や、現地の季節変化の状況の確認などのために、必要に応じて追加調査を実施した。

3-2 簡易社会調査1 - 地域の聞き取り調査

当該地区の将来のまちづくりに資するキーパーソンを対象に聞き取り調査を行った。この調査は、グループインタビューをまず実施し、次に調査の課題を設定して市民からの個別聞き取りへの協力を得た。

3-3 簡易社会調査2 - アンケート調査

現地調査と聞き取り調査をもとに、調査地区在住の市民が知る情報等をさらに少しでも多く集め

I 調査の趣旨と調査概要

ることと、「田園環境都市 小山」の具現化に向けた取組みの周知を目的として、地域の現状や課題それらに対する意見等を尋ねるアンケート調査を行った。

3-4 文献調査

各調査に必要な情報収集のため、当該地区に関連する各種文献について調査を行った。なお、調査にあたっては、小山市担当者が、小山市文書館、小山市立博物館、小山市立中央図書館など関連施設との調整を担った。

4 先進地調査

小山市がめざす、都市と田園環境が調和したまちづくり、「田園環境都市 小山」の参考となる先進自治体の現地調査を、小山市担当者とともに実施した。調査対象地としては、コウノトリの野生復帰プロジェクトを中心にすえて住民と行政が協働しながらまちづくりの取り組みを進めている兵庫県豊岡市を選定した。

なお、先進地調査の報告は、業務委託仕様書に基づき、本報告書とは別に提出した。

5 調査中間報告

上記1、2の調査結果とともに、これを踏まえた今後の「田園環境都市 小山」のめざし方を示す報告発表を下記日程、会場において行った。

- ・ 日程 令和3年12月11日(土)、12日(日)
- ・ 内容 第20回全国菜の花サミット in 小山

第4部 新たな潮流 風土調査から始める持続可能なまちづくり(発表)

第5部 分科会①持続可能なまちづくり(進行役)

調査中間報告資料(発表要旨およびスライドショー)は、業務委託仕様書に基づき、本報告書と分けて提出した。

6 「田園環境都市小山」基礎資料パイロット版の作成

上記3で行った中間報告を踏まえて、「田園環境都市 小山」を具現化させるとともに、市民・企業・市民団体・行政など各主体に「田園環境都市 小山」を浸透させて各種取組みの深化を図るための基礎資料として、本報告書を作成した。

II 踏査および文献調査による報告

1 地域の自然について

風土とは？

風土とは、地域の自然に人間が暮らしと生業を通して働きかけることでかたちづくられる、人々が生きる環境のことをいいます*。

* 前田穂編『神道』弘文堂、1988年、総372頁

それは、いってみれば人々が生きる身近な世界、生活世界でもあります**。

** アルフレッド・シュッツ、トーマス・ルックマン『生活世界の構造』那須壽監訳、筑摩書房、2015年、総634頁

図1 風土の定義

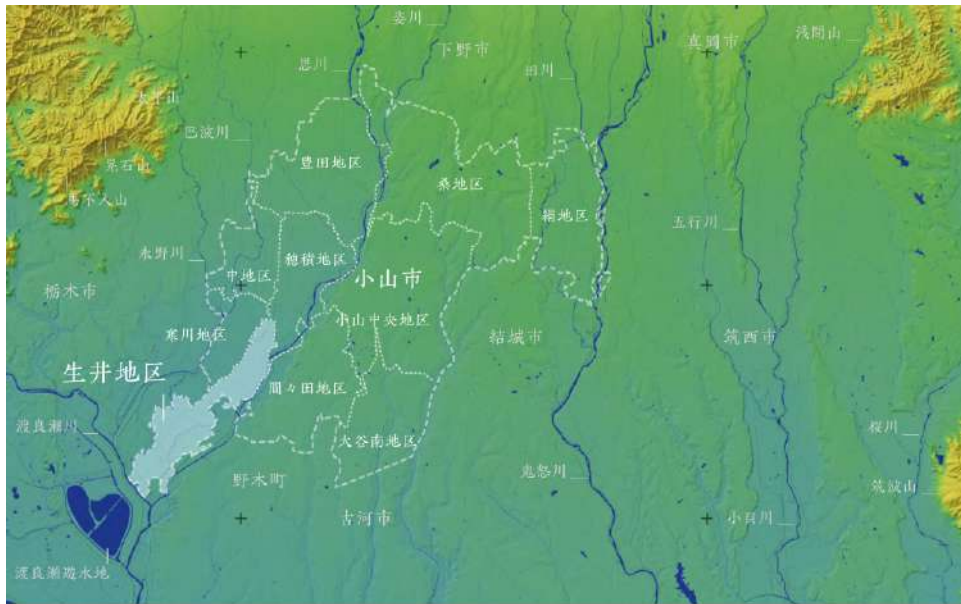
実際に地域を見て歩く踏査と、地域について書かれた書籍や論文に学ぶ文献調査を組み合わせ、地域の風土性について調査を行った。この調査は、はじめに「地域の自然について」、次に「地域の自然への人の働きかけについて」、続いてそのようにかたちづくられた「地域と人々の心身の結びつき」について、そして「景観から読みとれるその他のこと」を調べて記述する流れで実施した。

以下、その結果を市民への視覚的な説明にも用

いられるようにスライドショーとして整理したものを、順に掲載する。なお、図1には再び風土の定義を示した。

出典 | 前田穂編『神道』(弘文堂、1988年、総372頁)。
アルフレッド・シュッツ、トーマス・ルックマン『生活世界の構造』(那須壽監訳、筑摩書房、2015年、総634頁)

II 踏査および文献調査による報告

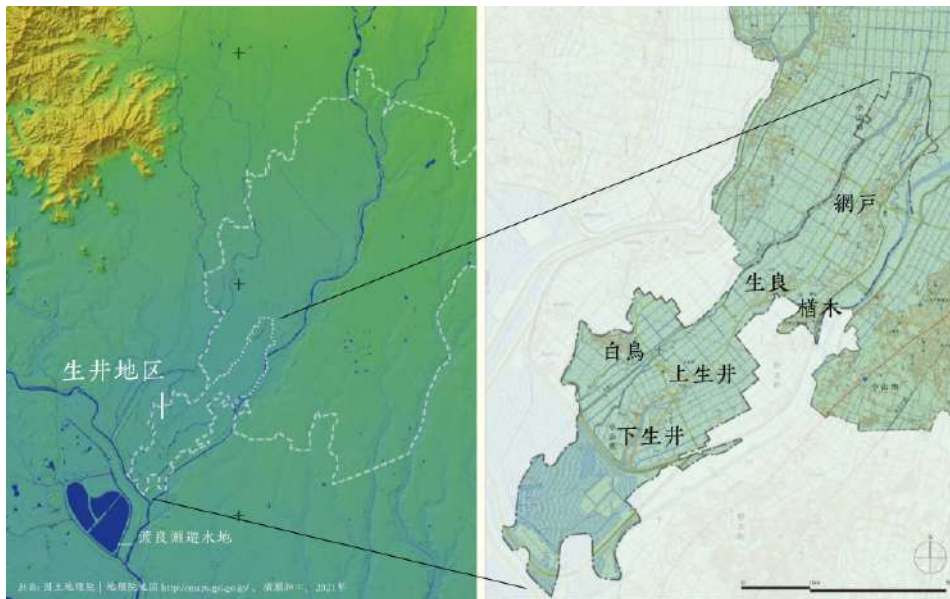


合併以前の旧町村の区分に基づく小山市内の10地区を示す | 出典: 国土地理院 | 地理院地図 <http://maps.gsi.go.jp/> を広瀬加工, 2021年

生井地区は、小山市の南西に位置します。

図2 小山市の地区区分と生井地区

市域は、旧町村の区分に基づいて10地区に分けられ、生井地区はその南西端に位置する。



生井地区の位置(左図)と地形(右図。標準地図+陰影起伏図) | 出典: 国土地理院 | 地理院地図 <http://maps.gsi.go.jp/> を広瀬加工, 2021年

「生井村は、明治22年(1889)(中略)六か村が合併して」

出典: 小山市史編さん専門委員会編『小山市史 通史編 III 近現代』(小山市, 1987年, 総1111頁)

図3 市制町村制の施行により六か村が合併して成立した生井村

出典 | 小山市史編さん専門委員会編『小山市史 通史編 III 近現代』(小山市, 1987年, 総1111頁) 178頁

II 踏査および文献調査による報告

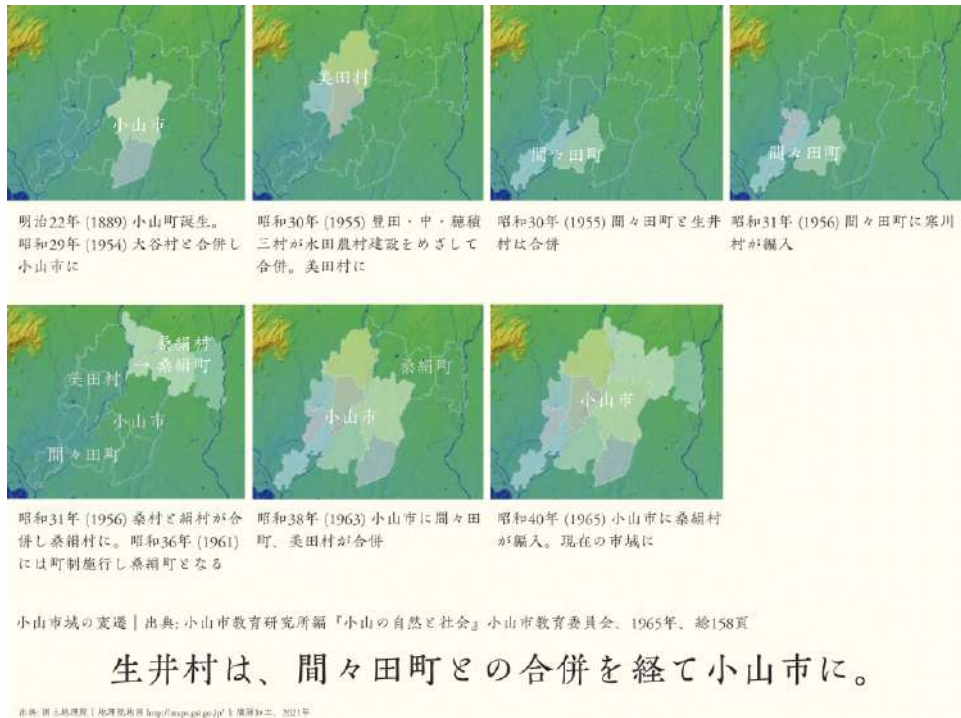


図4 小山市域における市町村合併の変遷

出典 | 小山市教育研究所編『小山の自然と社会』(小山市教育委員会、1965年、総158頁) 7-8頁

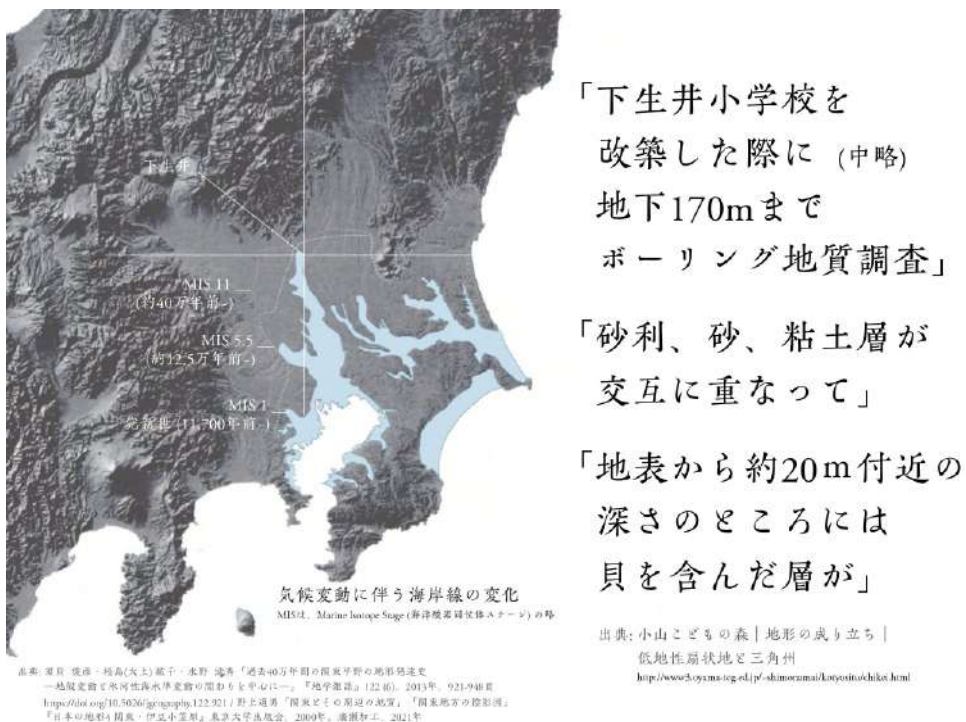


図5 約40万年前の古東京湾の海岸線が気候変動に伴って退き、関東平野の内海は湿地へ

出典 | 小山こどもの森 | 地形の成り立ち | 低地性扇状地と三角州
<http://www3.oyama-tcg.ed.jp/~shimonamai/kotyositu/chikei.html>

II 踏査および文献調査による報告

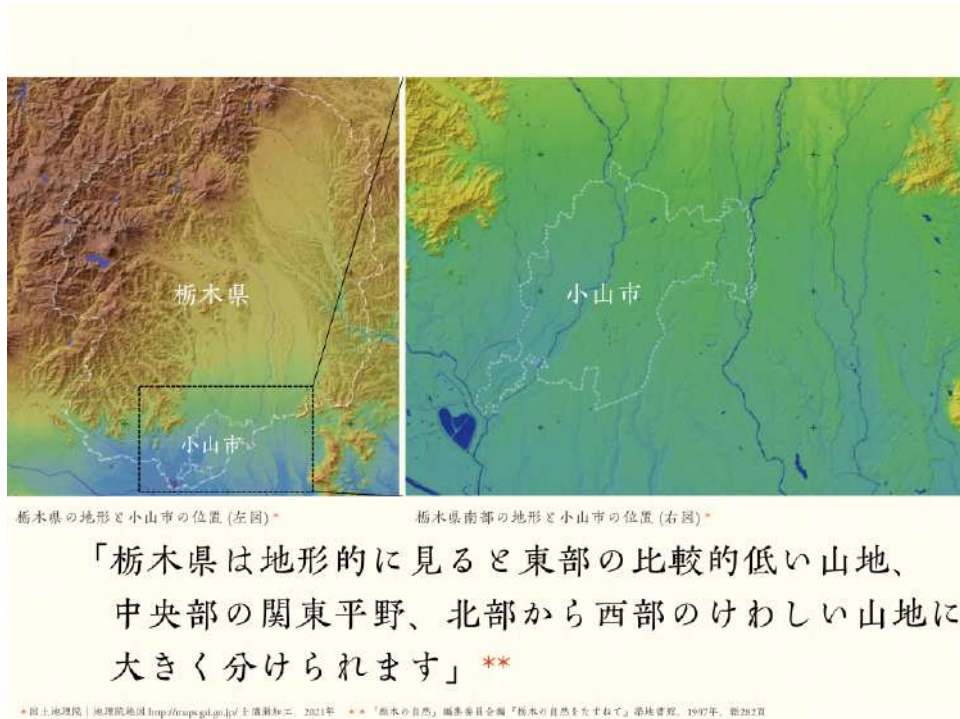


図6 関東平野の大きな広がりをもつ山地が囲う栃木県の地形

出典 | 「栃木の自然」編集委員会編『栃木の自然をたずねて』（築地書館、1997年、総282頁）

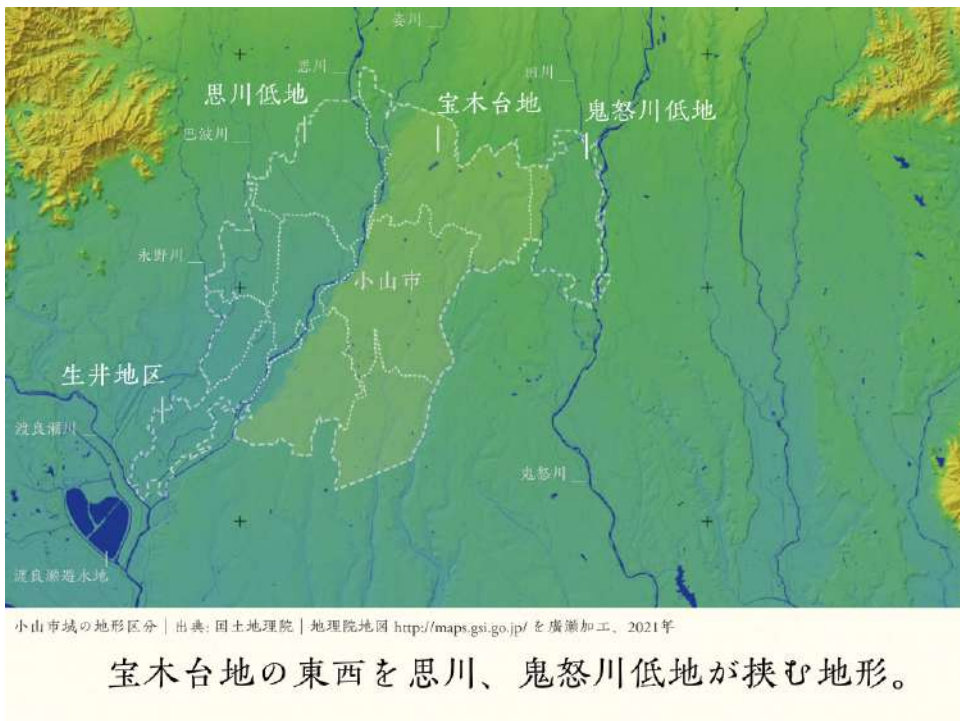
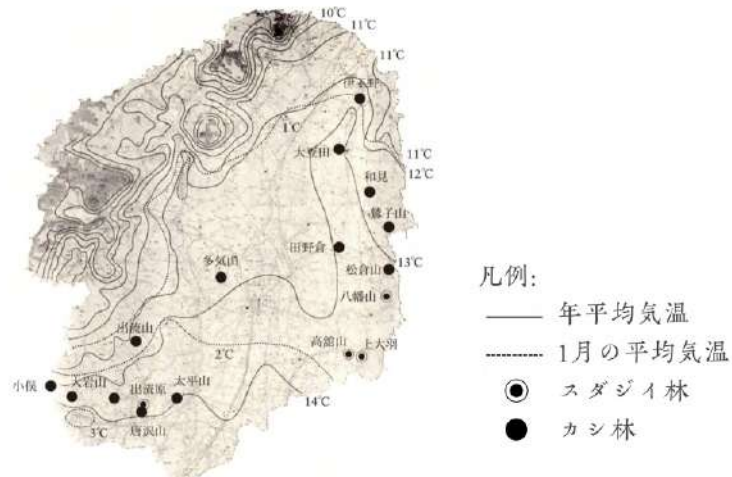


図7 小山市の基本地形

西から思川低地、宝木台地、鬼怒川低地が並ぶ地形を、台地の範囲に着色をして確認する。

II 踏査および文献調査による報告



栃木県内の年平均気温、1月平均気温と常緑広葉樹林の分布 (出典は下記)

スダジイ林は年平均気温が13-14°C、
 1月(最寒月)の平均気温が1-2°Cを分布の北限に。
 (小山域もこれに該当しスダジイ林が分布。暖温帯気候下にある)

出典: 五十嵐典夫ほか、1983、山手の歴史 452pp、山手町、山手/栃木の自然 編集委員会編 1997、栃木の自然をたずねて、282pp、環境書館、東京、南無社エス、2016。

図8 栃木県の年平均気温、最寒月の平均気温と暖温帯植生を構成する樹種の分布

「北関東」と大まかにくくられる栃木県であるが、南端の小山市は暖温帯気候下にある。



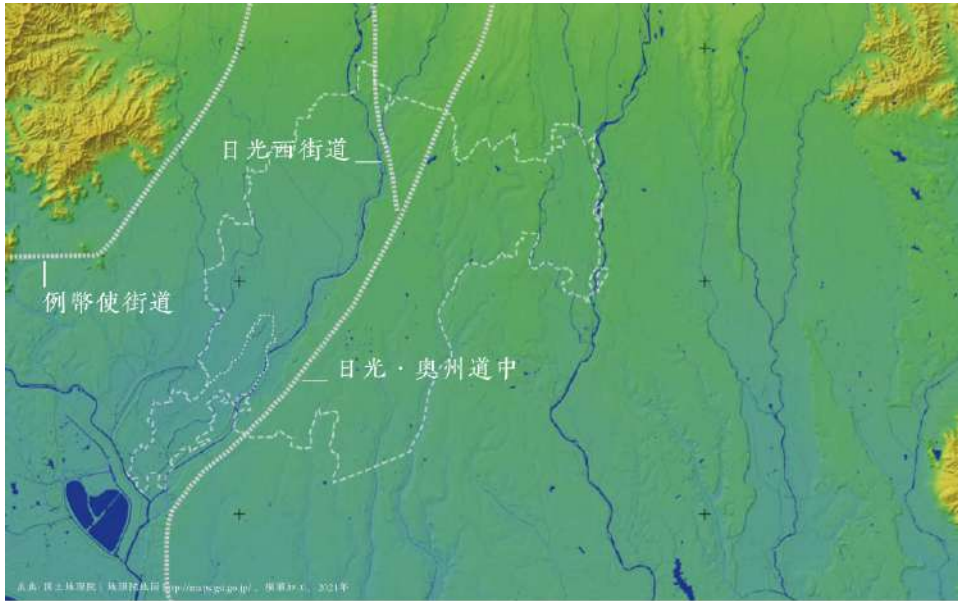
綱戸大橋より乙女大橋を望む。間々田(間々田地区)―思川―綱戸、生井地区2021/10/05

「中学校の通学(中略)行ったらうちらだけカップ着て」
 「そうそう。天気が違う」「生井あるあるだね」
 「川で変わる」。地区で微気象が異なることについての話題より

出典: 「生井地区 神籠平能楽まじりうたのりけい地区調査—アーツ・ヴィンテージ—」宇宮てせいの報告 2021年7月11日 10:00-12:00 生井会発表、2021年、14頁

図9 間々田地区と生井地区における思川を介した微気象の違いについて

2 地域の自然への人の働きかけについて



主要街道の分布 | 出典: 奥田久『内陸水路の歴史地理学的研究 - 近世下野国の場合』大明堂、1977年、総168頁

「栃木県の東部山地と西部山地との間の中央低地は」

出典: 小山市教育研究所編『小山の自然と社会』小山市教育委員会、1965年、総158頁

図 10 河川低地が広がる関東平野で、南北にのびる宝木台地は陸路を通すのに重用された。



出典: 野上達男『関東とその周辺地域の地質』『日本の地質と開発』野間小登郎、東京大学出版会、2000年、総349頁。廣瀬和工、2021年

● 阿部郷・橋本定綱・津田孝明・大地隆昌『栃木県の歴史』山王出版社、1998年、総384頁 ● ** 『第123社会展覧 下野の鎌倉街道』栃木県立博物館、2019年、総111頁

「古来日本列島の主要な縦断交通路となっていた」***
「市の西南部 - 寒川・生井地区は、水郷地帯」***

*** 小山市教育研究所編『小山の自然と社会』小山市教育委員会、1965年、総158頁

図 11 宝木台地には、古代以来広域陸路がもうけられてきた。

II 踏査および文献調査による報告



生井地区空中写真、1946/06/08 出典: 国土地理院 | 空中写真閲覧サービス <https://geolib.gsi.go.jp>

「思川は、(中略)低地性扇状地を形成し (中略) 網戸地区はこの扇状地の扇端部に位置 (中略) 今から50年ほど前までは井戸を掘ると被圧された伏流水が湧き出る自噴井が多く (中略) 下生井地区でもわずかですが (後略)」

出典: 小山こどもの国 | 地形の成り立ち | 低地性扇状地と三角州 <http://www3.yamanashi.ac.jp/~shimonama/kojokuni/choket.html>

図 12 生井地区の地形と地下水分布の関係

生井地区周辺では、台地の縁に縄文遺跡が分布し、弥生遺跡は発見されていない。



藤塚古墳の上になつ浅間神社。網戸。2021/06/23



生井地区(網戸)空中写真、1946/06/08 撮影

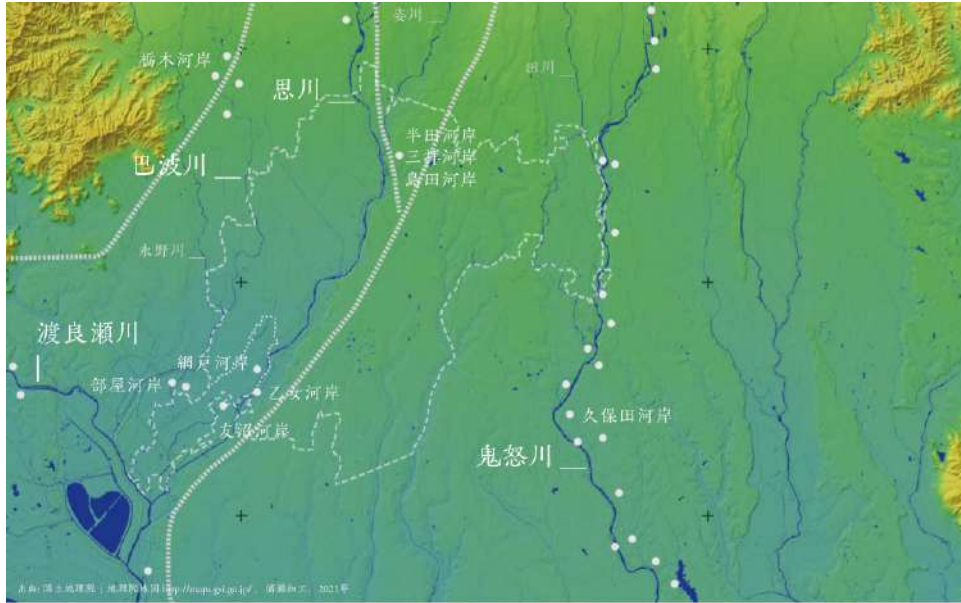
思川低地では、市域北部の大本、中南部の下泉と寒川に古墳群が立地する。寒川古墳群に隣接して網戸田辺遺跡、その東側に藤塚古墳が位置する。

出典: 『オリーブ 都立小山の未来を語る (2) 思川西岸の史地に築かれた古墳 (2)』小山市立博物館、1991年、1頁(図13頁)。国土地理院 | 空中写真閲覧サービス <https://geolib.gsi.go.jp>

図 13 古墳の分布

しかし、図 12 のように、井戸からの水の自然湧出に恵まれ、肥沃な低地部で、河川の氾濫は起きるものの権力を獲得し世襲するに至った集団があらわれた結果が、古墳時代からの古墳の分布より窺える。

II 踏査および文献調査による報告

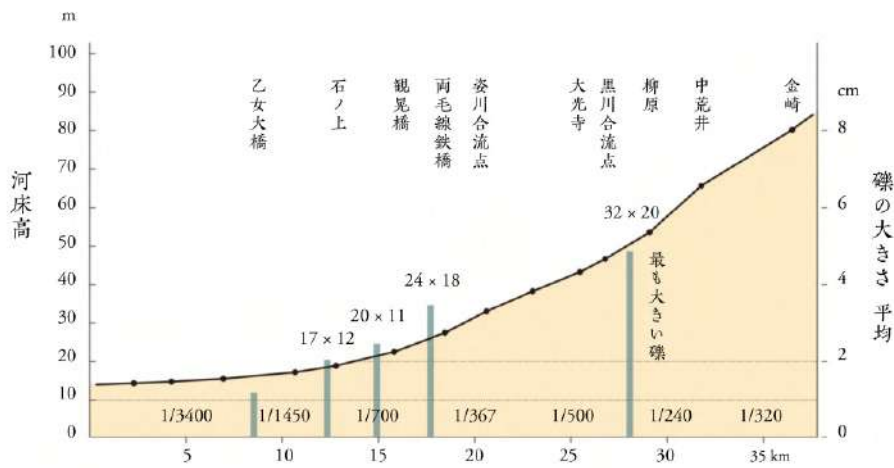


渡良瀬川、巴波川、思川、鬼怒川の河岸の分布 | 出典: 奥田久監修『橋本の水路』橋本県文化協会、1979年、絵376頁

「内陸では川や湖も、道路とともに交通路に利用」

図 14 陸路と合わせて主要河川も広域交通に用いられた。

思川は、日光街道、日光西街道の他、金崎周辺で例幣使街道とも平行する特徴を有した。



出典: 小山市史編さん専門委員会編『小山市史研究』6、小山市教育委員会市史編さん室、1984年、28頁(廣瀬写図、2022年)

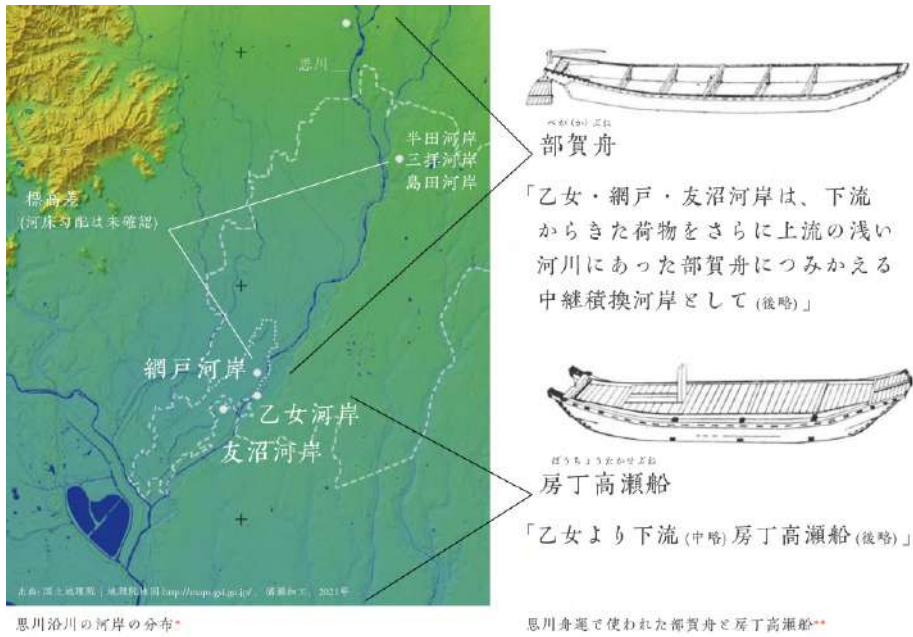
「河床の傾きは、金崎から黒川合流点までが大(中略)
乙女大橋からはほとんど水平な面になっている」

出典: 小山市史編さん専門委員会編『小山市史研究』6、26-27頁

図 15 思川の河床の傾きと礫の大きさ。乙女周辺を境に、河床の傾きは大きくなる。

出典 | 小山市史編さん専門委員会編『小山市史研究』6 (小山市教育委員会市史編さん室、1984年、総124頁) 28頁

II 踏査および文献調査による報告



「思川は、乙女附近を境にして上流は傾斜が急で」*

* 奥田久雄『橋水の水邊』橋本県文化協会、1979年、総376頁 * 奥田久『内陸水路の歴史地理学的研究-近世下野國の海女』大明堂、1977年、総108頁

図 16 思川の河床の傾きの変化に対応した運搬船の使い分け

河床の傾きが緩やかである他、水深が比較的大きな乙女・網戸河岸まで、大きな川船を使用できた。



「明治19年(1886)に東北本線が開通するまでは
東京-網戸間に蒸気船が往復(中略)『小湊ノ如キ感』」
「下生井村も(中略)栃木道を通り、思川に渡船場が」

出典: 小山市史編さん専門委員会編『小山市史 通史編(近現代)』小山市、1987年、総1111頁

図 17 思川を利用した桑の葉の運搬(明治45年、1912)

II 踏査および文献調査による報告



図 18 下生井櫻源寺境内に開校された下生井小学校の前身「扶桑館」(明治 41 年、1908)

生井地区は絹地区とともに、江戸前期以来の伝統を有した名高い蚕種生産地であった。



図 19 思川低地における微高地(自然堤防)の連続と分散

微高地が連続した思川沿いでは微高地上での畑作が、微高地は分散し後背湿地(低湿地)が広がる思川や巴波川から比較的距離のある範囲では低湿地での水田稲作が、それぞれ中心的に行われてきた。

II 踏査および文献調査による報告



図 20 治水地形分類図（国土地理院）

自然堤防は、洪水が土砂を河川の両岸に堆積させてできる。周囲の低湿地に比べて水はけがよい。



図 21 微高地（自然堤防）上に集落を構え、堤防の築造を組み合わせる

河川低地は、洪水が繰り返されるなどしてつくられる。そして、生井地区は、複数の川が合流する地域に位置する。そのため、微高地への居住を基本として地域的・複合的な水害防備策が用いられてきた。

II 踏査および文献調査による報告



図 22 屋敷林の機能

風害への対応を主に、洪水時には水害防備林と同様、水流の減勢、流木等の捕捉に役立つ樹林帯



図 23 生垣の機能

生垣は、低い位置を吹く風を垣に沿わせて逸らし、流れる水の勢いをやわらげ、それらに運ばれてきたものを留める効果を持つ。また、樹林帯ともども生物の生息空間となり、生物多様性保全に結びつく。

II 踏査および文献調査による報告



図 24 自然堤防上の家屋敷地にさらに盛土をしてもうける水塚（みつか/みずづか）

塚は、植物を植えて土留めをしている。本報告書Ⅲ章の個別聞き取り記録（53 ページ）を参照。



図 25 揚舟（あげぶね）。「大人 2 人と米 3 俵で大体 300kg が積載能力なのだろう」

出典 | サークルわかば『なまいの暮らし』（2000 年、総 50 頁）37 頁

3 地域と人々の心身の結びつき



図 26 「川の力と人間の力の見事な合作で生まれてきた平らな広々とした低地」



図 27 微高地の上の人間的な広場や道

図 26 出典 | 思川の自然調査委員会『都市の清流…思川を歩く』（小山市教育委員会、1994年、総 100 頁）

II 踏査および文献調査による報告



旧恩川の橋筋(長盛橋)の北。下生井、生井地区。2021/08/03

追分口。下生井、生井地区。2022/01/19

通過交通の進入はほぼない集落幹線道路の交差点、分岐点は、小さな広場のような性格も持つ。

図 28 下生井地区の交差点/十字路（辻。写真左）と分岐点/三叉路（追分。同右）。

地区の各集落内の幹線道路は、広域自動車交通と分けられて生活道路然としている。



図 29 生井地区から望む足尾山地と、奥羽山脈南端に含まれる日光連山

図 28 写真右に写る太平山道が、図 29 の太平山に続く。また、日光連山の標高は約 2300-2500m で、生井地区の標高約 13-20m と好対照を成す。山地と山脈は、市内を流れる各河川の水源域に当たる。

II 踏査および文献調査による報告



図 30 村に災厄が入るのを防ぐ「辻固め」。東生井（下生井、旧思川左岸）で撮影

長盛橋の対岸（西生井。下生井、同川右岸）の他、「辻固め」は地区内の各所で行われる。



「水神の指す方向は堤防の切れ所などが一般的」**

「水神宮の祭り (中略) この日は大杉さまども」**

「魚どりの守護神はほとんど水神であるという」*

* 栃木県北郷土資料館編『下野の漁撈習俗』栃木県教育委員会、1975年、第67頁 ** 高橋智夫文書研究会『漁水産農漁域における水神信仰と水産資源の歴史調査・研究報告書』2007年、第59頁

図 31 水神は、水害、舟運、漁などとの関係から信仰された

水と人の多面的なかかわりが、総合的に重視されていたとわかる。また、漁具と漁法から往時の河川環境と生物を、漁具材料から往時の植生や地域的な資源の持続利用技術を、それぞれ知ることができる。

II 踏査および文献調査による報告



図 32 2021 年 9 月中旬の白鳥の水田。穂が垂れ、黄金色に色づいてきた稲

引用は、グループインタビュー記録より。次章（Ⅲ章。26、63 ページ）で詳しくふれる。



図 33 カエルは、他にトウキョウダルマガエル、ニホンアカガエル、アズマヒキガエル等が分布

カエルを含む両生類は、水域、陸上とこれらの移行帯に生息する、生態系における中間的捕食者として重要である。(写真の 2 種を除くカエルの分布は、「レッドデータとちぎ WEB <http://tochigi-rdb.jp/>」で確認した。)

II 踏査および文献調査による報告



図 34 冬の富士山への眺望

富士山に関しては、同山を信仰の対象とした浅間神社の立地（合祀を含む）も、生井地区に関係する。

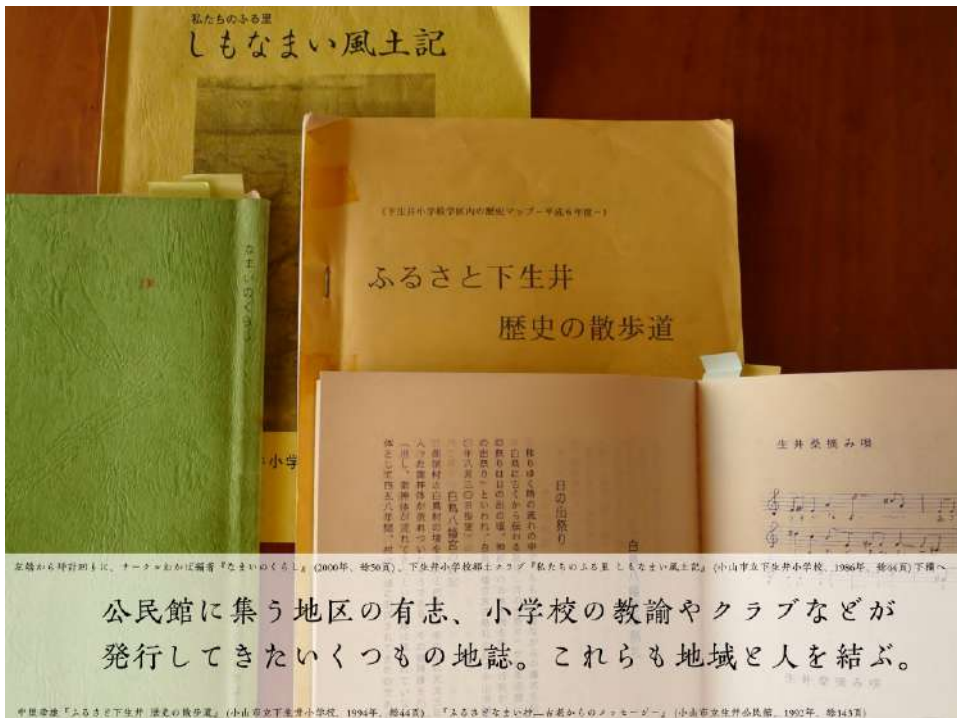


図 35 本調査において参照した地誌の一部。いずれも市民より貸与を受けた

文献調査に、小山市全域を調査・研究対象とした『小山市史』各編、『小山市史研究』各号、『小山の自然と社会』やウェブサイト「小山こどもの森」の他、図 35 に載せた地誌を活用した。

4 景観から読みとれるその他のこと



図 36 なまいふるさと公園（旧思川）に生育するコウホネ（スイレン科）



図 37 上生井の水田に生育するミズワラビ（ホウライシダ科）

コウホネは、栃木県が絶滅危惧種Ⅱ類に指定。ミズワラビは、農薬の使用等により各地で減少。



図 38 放鳥、渡良瀬遊水地で繁殖と、コウノトリの野生復帰の取り組みが進む

本市のコウノトリ野生復帰関連事業は、関東エコロジカル・ネットワーク推進協議会「関東地域におけるコウノトリ・トキを指標とした生態系ネットワーク形成基本計画」(2016年)への参画等を通して行われてきた。同計画では、「コウノトリ・トキの野生復帰に当たっては、安定的な生息が可能となる環境(ハビタット)を保全・再生する取り組みと共に、対象とする地域の人々の暮らしとコウノトリ・トキとの関係が安定的・持続的に継続されることが不可欠となります」とされる。

 出典 | 関東エコロジカル・ネットワーク推進協議会「関東地域におけるコウノトリ・トキを指標とした生態系ネットワーク形成基本計画」(2016年、総99頁)2頁。

https://www.ktr.mlit.go.jp/ktr_content/content/000743631.pdf

この「地域の人々の暮らし」とコウノトリとの「関係が安定的・持続的に継続されること」に関して、「暮らし」に営農が含まれるものとして、生態学的視点に基づく重要な指摘を以下に引用する。

「化学肥料と農薬は単一作物の大面積栽培を可

能にし、生産性と安定性を飛躍的に向上させた。しかし、一方では、コウノトリや朱鷺を絶滅に追いやるなど、生物相を単純化させた一因にもなった。人類が永続して生存するためには、生物の多様性を維持することも大切なことである。農業は本来、生態系と共存してきた生業といえる。単一作物を栽培する技術から、草を含めて複数の作物を立体的に栽培する技術をもう一度考える必要があるものと思われる」。

 出典 | 木嶋利男「ネギ属植物や雑草との間・混作による作物病害の防除」『雑草研究』56(1)(日本雑草学会、2011年)14-18頁

また、地域の人々への調査から集められた関連情報は、次章(III章。26、28、30-31、35、39、42-44、46-50、55-56、59-63ページ)に載せる。

Ⅲ 簡易社会調査による報告

1 目的と実施概要

1-1 目的について

生井地区で暮らす人々の生活や意識をできる限り実情に近いところで把握すること。

特に、過去と現在の生業や生活の様子、地域をどのように認識しているか、生井地区で暮らしながら、大切に守っていききたい地域の宝や、逆に解消したい困りごとなどについて、どのような考えを抱いているかなどについての把握を試みる。

1-2 実施概要について

令和3年7月から9月にかけて、下記の3種の調査を行った。①グループインタビュー（座談会形式） ②全自治会を対象としてアンケート調査 ③個別の聞き取り調査

特に考慮したこと

全自治会を対象としたアンケート調査では、本調査で立てた目的達成のためには、設問や、提示する選択肢が、住民が「日頃考えていること」「伝えたいこと」「語りたくないこと」に沿っているかどうかが重要になる。そこで、座談会形式のグループインタビューで語られたことをもとに、アンケートの調査票を作成することとし、3種の調査を同時並行的に行うのではなく、①→（アンケート調査票の作成）→②③というスケジュールを組み立てた。

①グループインタビュー（座談会形式）

令和3年7月8日に実施。

属性ごとに5名前後の方に生井公民館にお集まりいただき、座談会形式で、2時間のグループ

インタビューを行った。人選などについては地域の中でさまざまに活動をされている方にご協力をいただいた。

第1回：7月11日（午前）

子育て世代の方々：男性5名・女性2名

次第に記載した質問内容

- ・自己紹介（生井地区との縁、普段の生活圏）
- ・生井地区にある有形無形のもので大切に残したいもの、将来世代に繋ぎたいものは？
- ・生井地区にある有形無形のもので無くしたいもの、解消/解決したいことは？
- ・渡良瀬遊水地に隣接していることでのメリットやデメリットなど。
- ・ご自身たちの子ども時代の生活や学び、遊び、人間関係の状況と今の子どもたちの状況について

第2回：7月28日（午後）

農業従事者の方々：男性6名

次第に記載した質問内容

- ・自己紹介（生井地区との縁、普段の生活圏、作っている作物や経営の規模など）、
- ・農業を営む上で、現在直面している困りごとや心配事はありますか？
- ・また、逆に、生井地区での農業で、希望や可能性を感じていることは、ありますか？
- ・生井地区にある有形無形のもので大切に残したいもの、将来世代に繋ぎたいものは？
- ・生井地区にある有形無形のもので無くしたいもの、解消/解決したいことは？
- ・渡良瀬遊水地に隣接していることでのメリットやデメリットなど。

第3回：8月3日（午前）

長年にわたり地域活動をされている

70代以上の方々：男性4名

次第に記載した質問内容

- ・自己紹介（生井地区との縁、普段の生活圏）
- ・生井地区にある有形無形のもので大切に残したいもの、将来世代に繋ぎたいものは？
- ・生井地区にある有形無形のもので無くしたいもの、解消/解決したいことは？
- ・渡良瀬遊水地に隣接していることでのメリットやデメリットなど。
- ・自然環境、生業、子どもたちの遊び、祭や風習、人間関係など、この30年から50年くらいでの「変化」について教えてください。コウノトリが飛来するようになっての変化なども。

第4回：8月3日（午後）

現役で地域活動をされている50代60代の

の方々：男性6名

次第に記載した質問内容

- ・自己紹介（生井地区との縁、普段の生活圏）
- ・生井地区にある有形無形のもので大切に残したいもの、将来世代に繋ぎたいものは？
- ・生井地区にある有形無形のもので無くしたいもの、解消/解決したいことは？
- ・渡良瀬遊水地に隣接していることでのメリットやデメリットなど。
- ・特にコウノトリが飛来するようになってからの生井地区での変化について。

②アンケート調査

令和3年8月中旬から9月中旬にかけて実施。生井公民館、生井地区自治会にご協力をいただき、紙の質問票によるアンケートを実施。

スケジュール

- ・8/19 自治会へ依頼
- ・9/15 回収締め切り

糊付できる封筒に質問票を入れ、自治会を通して

配布。班長-自治会長-公民館-自然共生課のルートで回収をお願いした。質問票は、別添のアンケート調査結果報告書に掲載する。

③個別の聞き取り

感染状況を見ながら検討し、令和4年1月に2名の方に聞き取りにご協力をいただいた。

- ・女性：生業や歴史を調べ記録する活動や児童生徒に伝えていく活動に長年携わっている方
- ・男性：敷地内の水塚を改修しながら活用し、家に伝わる歴史的な資料を保存されている方

2 結果整理の手法について

グループインタビューにおいては、①書き起こしデータの作成 ②個人情報を残した形で、座談会の時系列に発言内容をまとめたもの ③個人情報を抜いて、トピックやテーマごとに発言の概要をまとめたものという3種類の結果記録を作成した。③においては、発言内容に関連した史実や、少し曖昧な記憶に基づく参加者の話を裏付ける記録などを、脚註の形で、各種文献から転載し補足する。

アンケート調査については、単純集計と、主要な質問において属性との相関をみるクロス集計を行った。概要版を次項の調査結果に掲載し、全データは、別添資料に掲載する。

グループインタビューと、アンケートの結果については、個々の検証に加えて、得られた情報をテーマごとに接続させて整理した「調査結果のまとめ」を作成し、「4 調査結果のまとめと考察」にて使用する。

3 各調査の結果報告

3-1 グループインタビューの記録

1 | 子育て世代の皆さん

対象者：7名。お子さんは小中高生。県外から嫁いだ人、小山市内の生井地区外から嫁いだ人、Uターンした人がそれぞれ1名ずつ。他の方は生まれも育ちも生井地区。

2021年7月11日 10:00-12:00 生井公民館

1：生活圏や他の地域との関わりについて

◎兼業農家で夫婦の勤務地が、小山市と古河市。そこが生活範囲になっている。時々子どもの希望で市外へ出かける。

◎生井の住民は、生活圏が小山市内ではなく、野木、古河とつながっている。網戸は、間々田が生活圏。

◎生井は、乙女大橋（昭和30/1955年）ができるまで小山市と分断されていた。

◎昔は古河へ行くバス路線があり、車も1家に1台あるかないかの頃は、バスで古河へ。

◎親世代の頃は、栃木～生井～古河をバスが往来していたので、子供が熱を出した時もバスで古河の病院に行っていた。

◎距離的には、野木が近いが、道路がなく遠かった。むしろバスで古河まで行く方が早かった。

◎松原大橋（平成8/1996年）できて、生井の生活圏は変わった。野木が近くなり、現在は野木の駅周辺か美しが丘へ買い物に行く人が多い。

◎野木駅から南（生井も）の住人の意識と生活は東京を向いて、間々田から北は宇都宮を向いていると思う。

◎豊田地区で仕事をしている。豊田地区と生井地区は似ているようで全然違う。どちらも古い田園

地帯だが、豊田は、子どもの習い事など、宇都宮や都市部の影響も強いと感じる。

2：生井の良さ～大切に守りたい地域の宝

2-1 人間関係・コミュニティ

◎人間関係とか友達関係なども田舎ならではの濃さがある。子どものころは、それが当たり前だったが、大人になって町（都市部）で育った知り合いができて、生井は友だち感や仲間感が独特で違うことに気づいた。

◎最初に来たときは、周りがお年寄りばかりで、若い方いなくて不安。しかし子どもが生まれて散歩をしていけば、近所のおばちゃんとおじちゃんが、「どこの家だい？」と必ず声をかけて「ああ、あそこの孫かい」と知らない方でも声をかけてくれるので、「子育てがすごくしやすい地域」という印象に変化した。

◎事件、事故など物騒な世相でも、生井は安心できる場所。

◎幼稚園も小学校も小規模だからこそ、目が行き届く。手厚い安心感がある。

◎生井は、人の協力がある。地域で「一つの目的に向かう力」があると感じる。

小規模校について

◎小規模校ならではの人間関係：1学年10人くらいで20人以下だと、男女の距離もなく、みんな苗字ではなく名前で呼び合い、家族、兄弟みたいな関係性が育ち、仲が良い。ただ、その中で喧嘩やいじめが起きると生きづらい面もある。

◎中学や高校に行って感じたのは、街中で育った同級生は、生井出身の者より、仲間を守る、庇うという意識が薄いと感じた。生井出身者は、大人になっても同級生の仲間意識がある。

◎一人っ子だが、学校で年長の子に優しくしてもらったことや、下の子に優しくできたことなど、

うれしそうに帰ってきて話してくれる。

◎下の子を面倒を見るというのは、自分たちの頃から。1年生の子にカブトムシとかを取ってあげたりしていた。

◎ここ1年ぐらいはコロナでできないが、1年生を迎える会で6年生が1年生をおんぶして教室に連れて行っていく。何年も続いている。

◎小学生の子ども自慢は、小学校の全員が友達で、先生たち全員の名前を知っていて、校長先生と毎日話ができるということ。

◎精神面が出来上がる前の小学校から合併していろいろな人にもまれておいた方がいいという考えもある。

◎生井にいても習い事やイベントなどで外の世界に出て、こんな人がいる、いろんな人がいるという経験をしていくと良いと思う。

◎大規模校で切磋琢磨できる子もいれば、小規模校の家庭的なところで褒められて頑張れる子もいて、どちらも良し悪し、子供による。

◎中学進学においては、下生井小、網戸小から、それぞれ30人以下の人数で、11クラスもある乙女中へ進学する。私たちの頃は、「川向こう」「生井のくせに」「網戸のくせに」という空気がどこかにあって、プライドを維持しにくいところもあった。

2-2 自然環境と農業

◎守りたいのは何と言っても「農業」です。そして大切に守りたいのは、後継者。

◎コウノトリがいる遊水地、自然環境も残したい。そういう意識がある人が増えた方が良い。自分の利益にならないことには関心がない、他人ごとになっている人が多い。自分の生活と周りで騒いでいること（遊水地、コウノトリ）の間に何か隙間や距離がある人が多いと感じている。

◎コウノトリで最近騒がれているが、住人にとっては当たり前の環境。大人になってから、生井っ

ていいところなんだと周りの人から教えられて、再認識している。

2-3 豊かな自然の中での子どもたちの成長

◎子どもの学年では、1/3 ぐらいが学区外から。学区外のあまり自然の中で育っていない子どもたちが、校庭に木の名前を先生が「この木はイチヨウ」と話してくれたら、次々と他の木にも関心を持って質問が絶えなかったので、学校では木の名前のプレートを作ったと聞いています。

◎田舎では、あまりにも普通のことでも、保育園に通ってくる都会の子は、木の根っこを見たことが無い子も、カエルが飛び跳ねているところを見たことが無かった子も。

◎子どもの通学の送り迎えで、自然の中を子どもと一緒に過ごす時間は、貴重であり、親も癒される。冬になると富士山が見えるが、子どもも「そろそろ富士山の季節だね」と言うようになっていたり、靄（もや）がたくさん出て、遊水地も雲海みたいな様子になった日があった。そういう日に通学で歩くと「今日は、雲の上を歩いているね」と話すこともある。「コウノトリが飛んでくるのは、田んぼに水が入ってからだよね」「だんだん麦が金色になってきた」と子どもが話す。

◎私は地区外から来たけれど、子どもたちはここで生まれ育っているが、自然への感性と言葉が豊か。普通に歩いていて、稲の色に「あ、変わってきたね。秋になるのかな」とか、「飛んでいるトンボが変わったね」「カエルが生まれたんだね、これから雨が降るのかな」と、天気への心配など。

3 これからの地域の課題

3-1 昔からの古いしきたりや寄合

◎昔は、何も楽しみがないから「おべっか」と呼んで、回り番の家に集まって飲み食いする寄合を、

年に何回かやっていた。

◎家を建てる時に、おべっか用に、ぶち抜いて広く使えるように八畳二間は誰の家でも用意して作ったそうだ。子どものとき、何でもここまでやるんだらうと思っていた。

◎いつごろかは分からないが、やはり負担がかかるというので個人宅での集まりはやめて、今は店でやって回数も減ってきている。地域によっては年に1回。

◎今の70代の人に聞くと、やはり楽しみごとの一つ。お祭りごとがあれば誰でもお酒が飲めるから、みんなが楽しみにしていた、と。

◎おべっかの女性版もある。地元の神様にお礼を言ったりする女性だけの集まり。やはり負担感はある。先輩たちに「これがあるから、地域は成り立っている」と言われたら、変えられない。

◎昔は、嫁が家に縛られていて、自由に外に出てお茶も飲めないから、理由をつけて外に出て飲み食いできるのが十五夜（十九夜のことか）だったと聞いている。お姑さんから逃れて、いろいろ話せて気晴らしになる。今は、その役割の1つにSNSがあると思う。

◎今の生井は、人の出入りがあまりない。昔から変わらないところが、良い意味でも良くない意味でも多い。変わらないところで良いところもあるが、新しいものを取り入れたり、変えていくという感覚が薄い。変えていかなければ次の時代につながらないのではないかと感じている。

◎昔から続く、地域の葬儀のしきたりや、「おべっか」や女性の集まりは、代々受け継がれて守ってきているが、それをやる意味が継承されていないと思う。親世代に聞いてもわからない。そうすると、負担感だけが増して、続ける意味がわからなくなっているのではないか。

◎おべっか自体は別になくさなくていいと思うが、強制のような雰囲気になってしまう面もあるし、土日働いている人などへの配慮も必要。逆

に、新しく入ってきた人は誘わない、などの面もある。そうすると、子供たちが「この地区はめんどくさいから、地域から出たい」と思うようになるのは当然のことかもしれない。

◎地域の会合では、若い世代が黙ってしまうのもあまりよくないと思う。異論を持っていても発言しない。下手に発言して、その責任が来たり、「こいつは変わっている」とレッテルを貼られることを心配するのか。いろんな意見を出して、話し合っていて決めていけたらいい。

◎集まりは、コミュニケーションをとる唯一の場。何もないと、昔と違って町場と同じようになっている。コミュニケーションが取れないと、こういう田舎ほど大変なことになってくる。

3-2 新しいお祭り「あんずっ子サマーフェスタ」

毎年、お盆明けの8月の日曜日に下生井小の校庭で、生井地区の、子育て世代の青年部が中心となって立ち上げ、主催する夏祭り。2012年（開始年は要確認）に始まり、現在は、コロナ禍で休止。舞台を作り幼稚園児や地域の人たちの演奏、生井桑つみ唄、小山音頭、日光和楽音頭などの歌と踊り、出店などで多くの人を集めている。

◎生井地区に。こんなに人がたくさんいたんだというくらい何百人も集まる。

◎今コロナでできなくてとても残念。

◎けっこう年配の方も来てくれますが、交通手段がなくて行きたいけど行けないという声も聞く。

◎東京に出て行った人、地域外にお嫁に行った人なども、同窓会のような感覚で来ます。

◎目的の一つにそれがある。生井から出て行った人たちが、年に1回、あの祭りに行く懐かしい地元の仲間に見えるという場所にしたい。

◎親の世代：地域ごとの対抗心がある。白鳥はこうだけど、上生井はこうだ・・・と考え方や行事のやり方などの違いにこだわる。合わせる気持ち、

生井で統一しよう、という意識は薄いと思う。

◎お囃子も違う。本当は同じだったのが、持ち帰って地域で練習し、自然と独特のお囃子になったのか。それを合わせる意識はなく、自分の地域のやり方を大事にする。

◎生井は、間々田の蛇祭りのように共通の祭りが無い。蛇祭りは祭としては1つで、地域ごとに創意工夫する。生井は、祭からして、それぞれ別々。だから、「あんずっこサマーフェスタ」は貴重。

◎東生井とか白鳥とか上生井とかという地域を超えて仲良くできるようになったのは、われわれ世代からかもしれない。「あんずっこサマーフェスタ」のような新しいお祭りの文化みたいなのができた。

◎地域を跨ぐ祭りでは、祖父が子どもの頃に「シャンシャン馬」(註1)というのがあったと聞いている。野木神社(野木町)を総社として、生井の一部、網戸も含めて旧寒川郡を、神主さんが馬に乗って、馬につける飾理についている鈴をシャンシャンと鳴らして回ってきたと聞いている。

註 1 | 『ふるさとなまい抄 —古老からのメッセージ』(平成4年、小山市立生井公民館) P94 に詳しい。本書によると昭和17年に取りやめとなり、戦後も復活はできていない。

4 遊水地に隣接して良いことと困ること

4-1 良いこと

◎メリットは、コウノトリでニュースなどに取り上げられるし、盛り上がってきているので、それで自然環境を残そうという方も増えてくれば、生井地区としても良いかと思うが、今のところ来訪者のマナーの問題などデメリットのほうが多い。
◎少し離れたところに住んでいるので、来訪者のマナー問題のデメリットより、メリットが多く感

じる。とても疲れているときに、昼間に遊水地へ行って過ごす、とても癒される。

◎命の洗濯ができる場所。一人で行ってぼーっと過ごしていると、自分は何てちっぽけな存在なんだと、悩みがバカらしくなって元気がでる。海に行くことと同じ効果がある。

4-2 困ること

◎車が増えてマナーが本当に悪くなっている。細い道でも飛ばす。一旦停止をしない。あぜ道に駐車する車が多い。タバコのポイ捨てもある。

◎小学校の周囲でも、地域の人では無い人が歩く姿が増えた。

◎信用しないのもどうかとは思いますが、リュックを背負って歩いている人など、コウノトリを見に来た人か、最近増えている空き家狙いなのか、気になってしまう。

◎ほとんどの人が、自然を楽しみながらウォーキングしているとは思いますが、自然が好きでコウノトリや遊水地に関心がある人には悪い人はいないと思うが、子どもの安全面からも気になる。

◎幼稚園の近くにコウノトリがいるときは、カメラを持った人たちの路駐も問題だった。見守り隊の人や、市の方が、注意してくれたり、張り紙をして、かなり減った。

◎田んぼの代掻きの時期や稲刈りの時期は農家さんにも、路駐は邪魔でしかないと聞いている。

◎マニアの人がコウノトリを撮った写真が新聞に載っていたが、そこに我が家の子どもがメインで写り込んでいて驚いたことがある。知らないうちにとられていたことに、親としては微妙な心境。

水害について

◎過去に生まれてから今までに、避難の経験が3、4回ある。

◎遊水地の水は、増水しても生井側には来ないが、上流の網戸側から生井に水が来る。

◎増水したらどんどん溜まって堤防が決壊をして、その川の水が全部生井に流れる。網戸で堤防が切れても寒川で切れても。与良川の向こう側で切れれば白鳥、与良川の手前で切れれば東生井と西生井が水を食らう。

◎巴波川と思川の堤防が切れたら大変。

◎生井地区は、高低差が複雑で独特。ハザードマップでも実情とあっていないところもあり、ここは大丈夫と想着いても、あっちのほうが実は高いとか。坂の下なのに、ここは水がこなくて、実はあっちのほうが水がくるということもある。

◎特に地区の外からここに来た身なので、そこがすごく分かりづらい。地形、高低差が独特で。

◎とにかく避難しかない。逃げないと無理。

◎避難先では、自宅の状況が気になる。かなり危険な状態なのか、水が引いてきたのか、リアルタイムで情報が欲しい。情報がないと、自宅に戻っていいのかどうか判断ができない。

◎遊水地に防犯カメラのようなものを設置して、避難先でも映像で確認できるようになるといい。

◎水害は、本当に大変だが、極論的な言い方をすると、突然の土砂災害や津波と違って、前もって予測ができる、分かるから。それは救い。

◎堤防のどこが切れても生井に水が来るということは、子どもの頃から言われ続けているから、避難の指示が出たら、逃げるしかない。

◎避難所にたどり着くまでが、大変な時もある。豊田の避難所への道で、3箇所くらい水没箇所があってと行けないことがあった。

2 | 農業従事者の皆さん

対象者：6名。40代から70代

米麦を中心に野菜・大豆の栽培を行う方も。

2021年7月28日 10:00-12:00 生井公民館

1 : 生井の良さ～大切に守りたい地域の宝

◎農業では、土地改良区がとても進んでいる。ずっと住んでいるとわからないが、こんな条件のいいところは日本の中でも珍しい。

◎生井っこというブランド米もできて、継続できている。地元でやろうと声をかけあって、それに賛同して動くことが大事。ただ、農家は商売が下手だから、消費者も上手く絡めて、関東に向けてもう少しPRしていく努力をしてもよかったかもしれない。

◎土手から眺める360度の景色がすばらしい。富士山、秩父、浅間、妙義、日光連山が見える。

◎コンバインがあちらこちらで動いている稲刈りの時期の風景はとても良い。

2 : これからの地域の課題

2-1 農業の経営と後継者のこと

◎規模が大きくなり手作業では間に合わず機械化しているが、経費の面で厳しく、農閑期はアルバイト的な勤めに出ている。

◎家族でも間に合わない分は、常時雇用でパートさんを雇っていて、人件費の支払いが大変。

◎野菜だけだと一年中手がかかって大変。生井地区の環境の中では、米や麦の兼業農家というのが主流。手離れがいい米麦主体でつくって、農閑期に、どこかで働くというのが主流のスタイル。

◎兼業で農家をやるとなると、機械化のための資本がかかるので資金が必要。休みも休めない。す

るとどんどん兼業農家はなくなってしまう。その田畑を専業農家が請け負うかと言っても無理があって請け負えない。

◎どこの家も跡継ぎ問題で悩んでいる。

◎生井の人はもう農家は大変だ、もうやりたくないという。ほとんどの世帯の子どもたちは、農家をやる意思はない。

◎長年、農業をやってきていて、いろいろわかっているが、これから先、どのような状況になっていくのか、どうすれば良いのか、見当がつかない。

◎後継者がいない農業者が亡くなったら、その人が所有していた田んぼを引き受けて耕作しているが、自分も年をとってきて次第にできなくなり、追いつかなくなる。

2-2 農地や自然環境の整備のこと

◎堀ざらい、土手の草刈りなど、何をやるのも人手不足で手が回らない。機械でやれるならオペレーター付で委託したいと言う話もある

◎旧巴波川(栃木市との境)、草茫々で猪の巣に。藤岡側は残土やゴミ捨て場に。

◎草刈りやってもイノシシの害が減るわけではない。近年はハクビシンも増えている。震災の後3年くらいヨシ焼をやれなかった頃から増えたと思う。

◎自然共生とは言っても、行政に予算がない、地域に人もいない状況では改善されない。

◎保全管理で多少の助成があるが、次の世代になった時に、草刈りなどをやる人がどのくらいいるのか。

2-3 農業と自然環境と生き物のこと

◎コウノトリのエサのためにも有機農業がいいが実際は難しい。人手不足の農家は除草剤もけっこう使う。生き物が減ってきているのはわかるが。

◎一時期、シラサギが増え始めた。2004年に「生

井っ子」生産が始まり(減農薬・減化学肥料)、その翌年から環境保全関係で一時期補助金が出ていた。減化学肥料の米を作ると10,アールあたりいくらの補助が出た。それで、地域全体で「なまっ子」も取り組みやすかったが、その影響でエサが増えてシラサギも増えたのではないか。

◎環境にやさしい農業では使う農薬が限られてしまうので、雑草は多くなる。すると農家の手間が増えて面倒くさくなるので補助金が出ても辞める人は出てくる。

◎除草剤や農薬だけでなく、水場をコンクリートで塞ぐから生き物の住む環境も無くなってきた。

◎10年前くらいは、ドジョウももっといた。

◎子どものころは、黒っぽい日本ザリガニもいたが、今はアメリカザリガニも見なくなった。

◎昔の湿地は雷魚、ウナギ、オイカワもいた。

◎農薬だけではなく、生活面での合成洗剤を使って川に流すようになってから急にいなくなった。

2-4 若い世代の流出のこと

◎長男が家に残って後を継ぐのが当たり前という時代ではなくなっている。長男が残っていても、地区外で働いていて地域での関わりは希薄。

◎子どもたちが出ていく一つの理由は、休みの日でも共同の作業などが多く、それに駆り出されるのが煩わしいというのがある。

◎人間関係が煩わしいという声もあるが、子育て世代にとっては、そういう地域の人間関係に助けられているという面もある。

2-5 祭りのこと

◎全国の祭も簡素化しているが、白鳥地区の日の出祭りも当家制が大変だと今は公民館で集まっている。補助金も出ているからやめられないが、若い人が継続していくのは難しくなると思う。

◎各地区の夏祭り、秋祭りはまだ頑張っている。そういう小さな集まりがなくなると、自治会自体がもうまとまりなくなってしまう。

◎四自治会それぞれに合計五つの神輿がある。今はコロナで神輿を社から外に出して見てもらうだけ。

◎今70代の人たちが中心の頃までは、盆踊りもやっていた。昭和50年ごろまでか。

◎だんだん繋がりがなくなってしまうのは時代の流れで仕方ないのか。

3：遊水地に隣接して良いことと困ること

◎来訪者の問題がある。コウノトリ見物や桜堤にくるひとの車が農道を通る。農家の作業中でも、こっちの車をどかせ！と騒ぐ人もいる。一旦停止しない車も多い。ポイ捨ても多い。

◎水害の不安は大きい。遊水地があるおかげで助かる面もあるが、上流部が大水になると危ない。

◎コウノトリが子どもを産んだことがニュースになって、全国的にも知名度は上がった。三重の友人から「お前のところではないか」と電話が。
◎コウノトリに準じて、この辺がもう少しPRできれば面白いが。農業にもいい影響があると良い。

4：今後の展望について

4-1 新しい祭りが持つ可能性

◎世代によって人数やまとまり方が違う。

◎自治会同士の対抗意識が強かった世代や、人数が多い世代では、四つの地区をまとめて一緒に何かやろうという発想は難しかったが、海老沼さんたちの世代が、四自治会に声かけて夏に小学校の校庭でお祭りをしてきている。(あんずっ子サマーフェスタ)。コロナで今はできていないけど。

◎「あんずっ子サマーフェスタ」の世代は、人数

が少なくまとまりやすい。若いうちはあまり付き合いがなくても小学校のPTAで顔を合わせるうちに繋がりができてくる。

◎ただ、そういう繋がりがずっと継続できるかというと、難しい。年齢や時代が変わると変化することもある。地域でいい繋がりができて人間関係で動いていけたら可能性はある。

◎田園環境都市で地元主体で何かやってくださいと行政に言われても、「俺が頭になってやるから」と言う人は今の時代にほとんどいない。仮に立ち上げてもついてこれる人がどれほどいるかわからない。働き方も多様化していて日曜が休みではない人や夜勤明けで昼まで寝ている人もいる。結局は、地域で誰かが頭になってやる人がいれば、地域は変わる。結局は人。

4-2 暮らし方の価値観

◎遊水地があって、広い田園が広がって、途中からコウノトリがお友達になって、せっかくこんな面白い地域に住んでいるのに、若い頃のように「金金金金」で、そんなことを追いかけている生き方ではしょうがない。最近は、もっと生活を楽しむ、生きるということに喜びを感じるような心にしないと、何のためにこんないいところに住まわせてもらって暮らしているのか分からなくなってしまう。

4-3 農業のこれからについて

◎後継がない農地は、建物とセットにして無償で提供して、農業をやってくれる人を探す。マッチングする。地元の人ではなくて、生井地区外で、生井の良いところもアピールして、就農したい人を探すほうが良い。

◎実際に近隣の地区の人で、(非農家で会社員とかで)農業をやってみたいという希望があって、

土日などに畑の片付けとか収穫とかパートで手伝ってくれている人もいます。

◎次でどうしていくか?が大事。世の中は、自然環境がどうの、食料自給がどうのなんて言い始めているが、農家だけではなく、非農家（消費者）も、今後は、農業をどう見ていくかが大切になる。

◎諸外国みたいに農家は社会に絶対必要だということで農家を生かす方策を考えていかないといけない。世界の先進国では、補助金が6割から9割補助金だと言われている地域がほとんど。日本の場合には生かさず殺さず。本当に自分の国を維持する覚悟があるのかどうかというのが疑問。

◎田園の自然環境を守るには、やはりお金がかかる。ただ、やっているというわけにもいかないから。今の兼業農家の人たちはできなくなりました。今の米麦農家ができなくなりましたでは、すぐに荒れ地になってしまう。

◎風景社への質問

都市部と農村部との橋渡しについて、ほかの地域でこういうふうにしたらうまくいった、例えば都市部の人間をこういうふうにしたら、この地域の活性化につながったとか、そういう例を知りたい。小山では、町場の方たちとこちら生井のような田舎の外れのほうでは、交流が無い。

◎風景社回答

一例を挙げると、風景社も一緒に活動している「シェアする農業・たねまきびと@益子」の事例がある。茂木町在住の自然栽培の農家支援活動を行っている方たちと一緒に、益子の遊休農地を借りて管理しながら、主に宇都宮市内など都市部から畑をやりたいけれどやったことがない、勉強したいという人たちを招いて、一緒に在来のサツマイモを定植から収穫、そして干し芋づくりまでを協働で行うもの。今年で活動4年目で、参加している都市部の人たちの意識も、自家用の作物や加

工品を作る楽しみに加えて、援農の活動や生産者との交流などにも関心が出てきている。他にも、県内では、消費者が農家支援として共同購入の「提携」の仕組みを作るお母さんたちや、新規就農者や高齢農家への援農として活動する、子育て中の母たちの団体「草むしっぺ隊」がある。

◎小山でも商工会議所と農協と行政三者三つ巴で提携を結んでいる。そういうものの活用の仕方として、もう少し踏み込んだ地産地消的な取り組みができればかと考えているので質問させていただいた。

3 | 50代60代の方々

対象者：6名。退職後などに自治会長や地域の世話役を
やっていたり現役世代の方々

2021年8月3日 18:00-20:00 生井公民館

1：生活圏や他の地域との関わりについて

◎昔、子どもの頃は田舎にしては賑やかで、電気屋さん、駄菓子屋さん、豆腐屋さんなど、お店が結構あった。普段の買い物は生井で済ませることができていた。

◎昔は、店もそこそこあったが、いろいろな事情でなくなった。生活用品は、車で野木へ買い物に行っている。

◎一番近いのが野木に買い物に行くが、ものによっては古河方面とか小山方面へ行く。

◎我が家では、大平にもたまに行く。距離はあるが、信号が無いので近い。

◎昔、バスの路線があった時から古河は馴染みが深い。だから今でも、野木、古河が生活圏に。

◎農協の理事などをやっていた時は、小山に飲みに行く機会もあったが、コロナもあって最近も小山にも行かない。

2：生井の良さ～大切に守りたい地域の宝

2-1 生井の特性

◎50年ほど前に結婚を機に古河から生井地区に来た。生井に来るまでは「水場」だという話しか聞いたことがなかったが、住んでみたら、ずいぶんと「歴史的な古い町」「例幣使街道に始まり歴史ある町」だと言うことがわかった。

◎生井の人たちは非常に優しく、遊水地もあり、コウノトリも来たので、進め方によっては、これ

から特に重要な、「これからの町」ではないか。

2-2 遊水地のヨシ

◎家業のよしづくり：私で19代目ぐらいの農家。渡良瀬遊水地のヨシを刈ってきて、よしづくりをやっている。農家で春から秋までは農作業で忙しいが、冬場は暇になる。父の代で農閑期によしづくりを始めた。東京が近いので、農閑期は東京に働きに行く人もいたが、地域にあるもので生業を・・・と言う父の信念があったようだ。昔は茅葺き屋根の家も多く、ヨシやカヤが、今よりもいいものがたくさん生えていて、みんなで争ってとるような状況。自然の恵みに支えられて、家業として細々と続けているが、量的には昔の1/10に減っている。

◎自治会の山分け：ヨシ山のことを「山」と言うが、昔は、自治会の「青年山」「消防山」と言うのもあり、山の入札金を活動に当てて、活動経費を賄っていた。今は、各戸から自治会費を集めているが、昔は逆に貯金ができるほど潤っていた。

◎遊水地のヨシは、非常に良質で丈夫。探検家と一緒に葦舟もつくった（後述）。

2-3 生業と生活が水辺とともにあった歴史

◎沼もあった。冬の間みんなで「搔乾：かいぼし」と言って沼の水を完全に抜いて、魚をとり、それを売って収入を得る人もいた。

◎昔は、いろいろな面で、遊水地や沼、川から恩恵を受けて暮らしていた。

◎学校の帰りに、そのまま川に遊びに行っていた。釣りもできたし、川の中に入ったり、発泡スチロールで船みたいなものを作って浮かべたり。

◎上の年代の人は、旧思川で泳いだ人もいた。

◎旧思川は、堰き止められた後も、しばらくは綺麗だった。その後は、家庭の雑排水がどんどん中に入るようになって、異臭が出て水質も汚れて、

タナゴもどんどんいなくなった。

◎生井ではタナゴのことをカンメンドと呼んだ。

◎タナゴが特に多くて、観光バスでタナゴを釣りに来るくらいたくさんいた。業者も採りに来て、デパートで売っていた。マスの餌にするためにタナゴをとりにきていた人もいた。

◎祖父は、先が窄まったペットボトルを逆さまにしたようなガラスの瓶「うけびん」に、餌を入れて、何十本も水の中に沈めて、タナゴをとっていた。餌に引かれてタナゴが入ってくるが出られない構造。デパートに売っていたようだ。

◎今は水がほとんど流れないから、タナゴが卵を産むカラスガイが減って、タナゴも減った。外来種が多くなったので食べられてしまう。

◎旧思川では、ミシシippアカミミガメと言う外来種のカメが増えている。昔からいるクサガメは減って、ミドリガメは少し。

◎産卵の時期など、家や畑にも上がってくる。つかまえて、川に逃がそうとしたら、雑食性だから魚が採れなくなると釣り師に怒られた。親戚がコンクリートに叩きつけて殺した。外来種で増えて過ぎて問題があるので、酷いが駆除するしかない。

2-4 歴史的人物や史跡

◎池貝家：下生井の新枡屋のところに、池貝家のことを書いた石碑（註2）がある。相当昔のもので、地域としても大切な歴史だが、知る人も少なくなっていて、あまり大切にされていない。刻まれている文書も写して、保存しておきたい。

註2 | 下生井小学校郷土クラブ編『私たちのふるさと しもなまい風土記』（昭和61年9月発行）P26より転載
「池貝与作さん（和算家・測量技術者）文政5年（1822年）下生井村に生まれる。（中略）明治時代になると全国的に地租改正や土地台帳作成の仕事が行われました。その時測量技師として大活躍したといわれます。下生井地

区は、明治9年（1876年）に測量して土地台帳が作られました。この台帳は池貝さんの手にかかったものです。与作さんは明治33年（1900年）に亡くなりました。その後、池貝与作さんに教えを受けた門弟たちが与作先生の功績を永く後世に伝えるために記念碑を建てました。記念碑は、しんます屋さんの北側にあり、与作先生の業績と碑を建てた門弟110名の名が刻まれています」

下生井小学校編『ふるさと下生井 歴史の散歩道』（平成6年11月）「◎池貝与作顕彰の碑」より転載

「（前略）その業績をたたえ、郷土の人たちの手によって、その顕彰の碑が明治34年（1901年）に建てられました。その碑の題字は、当時の栃木県知事（溝部惟幾）が書いています。（後略）」

◎荒糶角太郎：養蚕の歴史の中で、世界で初めて品質管理を考えた人が荒糶角太郎（註3）。蚕の種を生井から世界に輸出していた。紙に産みつけた蚕種を輸出する方法で品質を落とさないやり方を考えて、それがあつという間に世界に広まった。生井の人が、蚕のことだけではなく、日本の素晴らしさを世界に発信した業績。もっとみんなの記憶に残るように、しっかり残してもらいたい。写真や記録の資料もいろいろあつて、一時期は市が買い取るか引き取るかという話もあったようだが、今は、どうなっているのか。

註3 | 小山市史編纂専門委員会編『小山市史研究2』「明治期における下都賀郡小山地区の養蚕業の位置—生井村蚕種業を中心に—」には、明治時代の生井村の養蚕業に近代科学を導入した立役者として「荒糶家」が登場する。以下、関連箇所を抜粋する。

「明治二四（一八九一）年、生井村蚕種業を代表する養蚕書が相継いで勘定された。一は荒糶順蔵『蚕業摘説』（二月）、いま一は荒糶甚兵衛『養蚕教草』（十一月）である」（P57）

「明治十九年、微粒子病検査員育成を対象とする西ヶ原蚕業試験場が解説されると、生井村では渡辺彦四郎、荒糶

角太郎、須田治右衛門の三名の蚕種家が逸速く受講している。これは『養蚕教草』の荒粉家に限らず、生井村蚕種家全般の蚕種業に対する積極的な姿勢を物語る一例であった。その内の一人、荒粉角太郎は、同試験場卒業後、下都賀郡寒川村蚕糸業組合の蚕種検査員となり、同二〇年にはさらに県蚕種検査員に採用されて、県下蚕種業の改善に尽力した。しかも、明治二〇年以降は支那種と日本種交配種の研究を敢行し、「角又」なる優良品種の創作に成功、「野州清白及支那掛角又」の名で全国的に喧伝されるに至った。」(P59)

◎碓井要作：下生井生まれの、明治時代の碓井要作という人もいる。蚕種の仕事をして、県議会議員になり、田中正造と一緒に、河川改修問題や谷中村の問題で活動していた人。博物館で一度、展示（註4）をやっている。

◎遊水地で、唯一、耕作地が残っているのは下生井自治会だけ。これは、碓井さんの功績（註5）なのではないか。石碑もたくさんある大きなお墓が残っている。

 註4 | 平成30年3月31日～5月27日・小山市立博物館「碓井要作―田中正造とともに歩んだ蚕種家―展」

註5 | 碓井要作は、上記展示の図録によると、明治40年（1907）に栃木県議会議員となっている。

【風景社コメント】

また、前出の『小山市史研究2』によると、大正初期に生井村産繭額が明治末年に比べて半減し、蚕種製造枚数も皆無となっていた事実が述べられている。この著者・鈴木芳行氏は、『下都賀郡少志』（大正七年）からの引用として、「大正元年に生井地方の桑園の買収があり、多くの蚕種家が廃業した」ことを紹介している。この買収は、明治四二年に、栃木・茨城・群馬・埼玉の四県と明治政府によって企図された渡良瀬川改修工事に伴うものと思われる、と記している。以下は、これらの資料と、グループインタビューでの聞き取りとを結びつけての推測にすぎないが、生井村の議員であった碓井要作氏が下生井の桑園を買収されずに残すよう、なんらかの対応策をとった可能性も

無くはないかもしれない。

◎小谷城跡：守りたい、残したい史跡だが、そのために人手が足りなくて困っている。城跡に「神明宮」が作られている。そこを、代々続く「神明組」というのが守っていて、今も引き継いで有志で守っている。年に数回、草取りをして小さな祭りをやっているが、みんな高齢化で人数が減り、今は8人くらい。将来的にどのような形をとっていくのか、皆さんでいろいろ話はしているが、なかなか良い策がない。

◎若い人たちは興味ないし、年寄りたちが死んだら、それで終わりかと思う。

◎水塚と揚げ舟

昔から水害があるのが当たり前のような土地だったので、どこの家も高台にした納屋に舟を吊るしていた。家も高台にして。水塚と揚げ舟も、今はもう残っているものが少なくなったが、これも大切に守り、伝えたいこと。

2-5 自然環境と農業

◎渡良瀬遊水地第2調節池：大切に守って残していかないといけない場所だが、いつも何かしら工事をしているので仕方がないと思うが、もっと中に入って気軽に遊べるようになると良い。大雨で調節池として機能する時以外の日数の方が圧倒的に多いので。

◎ブランド米とコウノトリ：水害に苦しめられてきた土地だが、見方を変えれば、そのおかげで美味しいコメが採れる土地。減農薬の「なまいっ子」、無農薬の「ふゆみずたんぼ米」。

田んぼを代掻きしたり、稲刈りをするときコウノトリが本当にすぐ近くにきて、餌をついばんでいる。それはやはり「貴重な風景」であり、それがここ数年、当たり前の風景になってきている。これは、大きな自慢。

◎ヨシと葦舟：今は交流館にある葦舟も、コロナもあったが、オリンピックの聖火を乗せて、短時間でも思川で浮かべられたら良かった。

◎遊水地のヨシで葦舟を作った経緯

農業新聞に掲載されていた「探検家の石川仁さんが被災地を元気づけようと北上川でヨシ舟を作って浮かべた」という記事を読んでいた。その数日後に石川さんから「関東でヨシ舟を作る計画があるが、いいヨシがありますか？」と、電話があった。それでどうせなら生井でも作ろうと、有志で立ち上がり市にも提案して、石川さんを招いて作るようになった。今のものが3代目（台数としては4代目）

◎今は、地球の温暖化というか乾燥化の影響もあるのか、また堆積場にもなっていてヨシ山自体が潰れているところもあり、ツル性の植物に覆いかぶさって、製品として使えるヨシが減っている。

◎しかし、各地のヨシをみてきた石川さんには、富士山、北上川河口とか、琵琶湖などより、遊水地のヨシが、長さも強さも、品質が最高だと言ってくれていた。そのことも生井が誇れること。

3：これからの地域の課題

3-1 地域活動の担い手不足

◎消防団や祭りや草刈り活動の担い手がいなくなってきたこと、おべっかも廃れていっていることは、解消したい困りごとと言える。

◎若い人たちは無くしたいとは思っているかもしれないし、こんな大変だかた辞めちゃえ、と何でも自由に言えたかもしれない。

◎自分たちの世代は、最初はいろいろ思うことはあっても、我慢してやってきて、それで良かったと思っている世代だから。

3-2 地域の祭り

◎20年くらい前までは、祭りも盛んだった。4地区ごとに盆踊りをやっていた。いろいろな面でのぎやかな時代。神輿もみんなで担いで部落の中を回った。

◎神輿はもう何年も出てない。理由はコロナだけでなく、担ぎ手が減ったので。

◎今年は、自治会の役員だけでお祓いだけはして、神輿も外に出して掃除をした。

◎祭りの日は、昔は、曜日関係なく、日にちで決まっていた。4自治会とも8月1日（註6）と決まっていたが、土日では無いと休めない会社員などが増えて、8月第1日曜日になった。

◎我々が生まれる前は6月16日。7月22日になった時もあり、小学生の頃には8月1日に。

◎10年ぐらい前から、若い人たちが中心になって、「あんずっ子サマーフェスタ」が、地区全体で始まった。コロナで中止になったけど、10年くらい続いている。舞台を作って、地元の若井人たちが店を出して、見事。素晴らしい。

◎本当に賑やかで、あれが、本当のお祭り。子どもたちも楽しみにしている。

註6 | 下生井小学校郷土クラブ編『私たちのふるさと しもなまい風土記』（昭和61年9月発行）P37より

「夏祭り（天王様） この祭りは古くから大杉様とか天王様とか祇園祭といわれ、農作物の豊作と家内安全を願って祭り行事が行われてきました。祭りは地域により多少異なりますが、大人みこしや子どもみこしが区内を村回りをします。みこしに連れて若衆のおはやしがつきものです。祭礼の日は、各家庭でまんじゅう等ごちそうを作り親戚に配ったり、おまねきしたり、それはそれはにぎやかでした。以前は、四地区別々な日が祭礼になっておりましたが、最近は一統され8月の第一日曜日ごろに行われるようになりました。古い伝統ある行事は永く保存しておきたいですね」

3-3 おべっかと十九夜

◎男衆が集まり飲食する「おべっか」は、自治会で12くらいある班を、2つか3つずつまとめた「ツボ(坪)」ごとにやっていた。南ツボとか、舟戸ツボとか呼んで。舟戸は、舟着場のこと。

◎昔は娯楽がなかったから、おべっかが楽しみだった。年に多くて6回とか7回。今は回数が減って年に1回のところや年に2回のところもあり、個人の家ではなく飲食店でやっている。そのツボの単位で旅行も行ってた。

◎各家、回り番で、みんな米を持ち寄って、料理する。昔は鶏ををつぶしたりしていたことも。年番が段取りをする。

◎1戸に一人が参加する。だいたい世帯主。おじいちゃんになると抜けて世代交代。

◎おべっかに付随して儀式があるところも。舟戸ツボでは、頭のついた魚、イワシを3匹と豆腐を1丁買ってきて愛宕神社にあげに行く。一番若い衆の務め。真冬の寒いときでも感謝の気持ちを捧げに行かなくてはいけない。若い時に、豆腐をひっくり返して怒られたこともある。

◎女性が集まるのは、十九夜様。確か年に1回で3月。今は、お店でやっているようだ。馬頭観音や、お寺のところにある十九夜様に御供物をあげる。子どもができた時、生まれた時も何か捧げる。

3-4 おべっかの良さと、存続の難しさ

◎おべっかのような機会がないと話せないことも、いろいろと話せる。コミュニケーションをとり、親睦を深めるのに良い機会。

◎年代はバラバラで、長老と若い人が入り混じるので、飲みながら話すと、地域の歴史的な話など、いろいろな話が聞ける。

◎親が早くに亡くなり、二十歳ごろから出てるから年長者から戦争の話を聞くことができた。

◎最初は嫌だったんだけど、聞いていると面白い。

年寄りの昔話は聞いていると面白い。

◎若い頃はつまらない話だと思えるかもしれないが、年とともに話の面白さや重みがわかってくる。

◎家族から聞くのではなく、他所の人から聞かから、また良いと思う。

◎若い世代にも参加してほしいが、年寄りがいままで頑張っていると、なかなか世代交代しない。それを楽しみにしている年寄りもいるから難しい。若い人は、地域の中では、いまでも若いから、使いつ走りが多くて大変だ。

◎60でも若い衆って言われる。下がない。

◎地域に、30代40代があまりいない。いても寄り合いに参加しないが、それぞれの考えがあり、強制はできない。

◎会社員の友人は、最近の新入社員は誘っても飲み会に来てくれないと言っている。飲み会に行こうと誘うと、それは残業ですかと聞かれる(笑)。

◎25年ぐらい前でも、職場で新入社員に「30年ぐらい前はこうだった」という話をすると「今は時代が違うんですよ」と嫌がられた経験がある。

◎今は、下の世代には、昔に比べたら、いろいろな面で気を使わなくちゃいけない。

◎若い世代への接し方、扱い方は、難しくなってきたと思う。

3-5 消防団の活動

◎入る人がなくて困っている。

◎昔は、消防に入って一人前だと思っていたので早く入りたと思っていた。

◎1日と15日が毎月点検。私たちの頃は、会社員だろうが何だろうが、早退してきて夜7時までに消防小屋にいないといけなかった。その前に、新入りは消防自動車を出して磨けと言われていた。汚れていると嫌味を言う先輩も昔はいたが、今は、そんなことはなく、アットホームな雰囲気。

◎入団を誘うポスターが、いろんなところに貼ってある。どこの地域に行っても、なり手不足で困

っているはず。あくまでもボランティアなので。
◎時間的に束縛されることも多いし、大変な思いもあるが、点検の後にみんなで飲むビールの時間はいつも楽しみだった。

◎消防は、水防訓練もやる。小山市主催の、いろいろな土嚢をつくる訓練もあった。土が用意してあって、それを袋に入れて、素早く積み上げる訓練や、3種類くらいの土嚢の作り方などの講習があった。

3-5 水害の不安

◎水害の不安を無くしたいというのは、誰もが思っていること。新しい排水機場を整備しているが、実際、上流が切れたら全部ここに水が流れ込んでくる。大量に流れ込んできたら、まずどうなるのか、という問題。

◎台風 19 号（令和元年）は、上流の永野川などの堤防が切れて栃木市で大きな被害が出た。その大水がそのままここにきていたら、どのくらい貯まるのか、どうなるのか、誰も予測できないのではないか。

◎水というのは高い土地から低い土地に流れるしかないから、ここへ貯まるのは目に見えている。

◎東京を守ためには、こっちの堤防が切れても仕方がないと国は思っているのかもしれない。

◎利根川が良い例。羽生の利根大堰からずっと、右岸堤防の強化工事(註 7)を続けている。江戸川も確か、右岸はスーパー堤防にしている。

◎利根川の堤防を作るための泥は、遊水地から持っていつている。

◎毎朝、100 台ぐらいのダンプがきて、それが何往復もして泥を運んでいる。それだけこの泥を使っているのであれば、まずは、ここの堤防をなんとかしてもらいたい。

◎ここでは、72 年たって土手がよくなったと、みんなで喜んでいるが、普通は、人命を考えたら、だいたい 10 年か 20 年できちんとできるのでは

ないか。甘く見られてるのではないかと思う。

註 7 | 国土交通省 関東地方整備局 利根川上流河川事務所ウェブサイトより転載

<https://www.ktr.mlit.go.jp/tonejo/tonejo00147.html>

「事業所の事業 首都圏氾濫区域堤防強化対策
利根川上流部及び江戸川の右岸堤防がひとたび決壊すれば、その氾濫は埼玉県内だけでなく東京都まで達し、首都圏が壊滅的な被害を受ける恐れがあります。このような被害が発生する恐れのある区間において、堤防の浸透に対する安全性を確保するために、堤防拡幅による堤防強化対策を実施します。」

4：遊水地に隣接して良いことと困りごと

4-1 遊水地の利用

◎昭和 40 年代ごろ：遊水地のなかに砂山があって、小学校の頃は、そこでよくそこで遊んでいた。思川の工事の時に、川底から排出された土砂だったと思う。

◎昭和 50 年代？：小山市なのか国交省なのか分からないが、遊水地にソフトボール場、テニスコート、サッカー場、野球場があった。夜中には入れないようにしていたようだが、どうしても暴走族が入り、騒音が問題になっていた。通報しても、警察もきちんと対応できず、近所の家では睡眠不足になっていた。

◎その後、遊水地に、総合レジャーランドみたいな計画や空港ができるような話があったようだ。

◎昔、埼玉と栃木と茨城と群馬の 3 県が協議して、遊水地に貨物空港基地を作ろうという話が出たと思うが、自然と消滅したのでは無いか。

4-2 良いこと

◎同じ小山市に住んでいても、渡良瀬遊水地を知らない人が多かった。コウノトリが来るようになってマスコミも騒ぐようになったら、小山にこんなところがあったのという人が、けっこういる。小山市民に対しても、コウノトリが縁で遊水地の宣伝になった。

◎遊水地で、小山市に入っている面積は少ないと聞いている(8%)が、あそこによくぞコウノトリが来てくれて巣作りをしてくれたのは、奇跡みたいなもの。東日本で初めて。ヒナも、遊水地の生井地区で生まれたと、市はいろいろな面でPRの仕方がうまかった。

◎生井地区の素晴らしい景色も自慢。海とか山とかではなくて、これだけ広大な平地があって、特に冬など富士山もきれいに見える。夕日も素晴らしい。そういうことも続けてPRしたい。

◎家族でもコウノトリの話題が出るし、子どもたちも、小学校の校庭をコウノトリが歩いていたりするから、とても身近に感じている。特に、ヒカルは、親しまれている。

◎下生井の小学校の子どもたちは幸せだ。学校で近くでもコウノトリに遭遇できて、それが当たり前のようになっている。

◎コウノトリは、けっこう人なつこい。田植えのときは、トラクターの後ろにずっとついて歩く。稲刈りではコンバインの後ろにずっとついて歩く。カエルなどの餌が採りやすいようだ。

◎シラサギよりも警戒心が弱い、人に慣れている。

◎見守り隊の人たちのおかげだ。

4-3 困ること

◎写真を撮りにくる人の車のマナーが問題。田んぼの中の道路に車をとめられ、トラクターやコンバインが迂回しなくてはならない状況になる。一

部の人だが、誰かがやると他の人も真似してしまう。運転席を離れてしまうので注意しようがない。

◎土手の斜面や上へのポイ捨てもある。

◎見守り隊の人たちなどが、朝のゴミ拾いや掃除をしてくれている。

◎草が伸びてくると、ゴミも見えにくいから、余計に捨てても良いと思うのか。きれいに草を刈っただけでもポイ捨てはある。

◎そういう人は、普段、道路を走っていても、車の交通量が減ったり、田んぼの中に入ったら、車からも捨てているのだろう。

◎ゴミは、捨てられる場所がほしい同じところ。

4 | 70代 80代の方々

対象者：4名。昭和10年代～20年代生まれの

地域の長老的な方々

2021年8月3日 10:00-12:00 生井公民館

1：生井地区の歴史

1-1 生活圏と他の地域との関わり

◎生井という地名だが、生井という苗字の人はいない。間々田や豊田にはいる。

◎養蚕が盛んだった頃、働きに来ていて、そのまま住み着いた人も。人の出入りは多い地域だった。

◎武士の争いの結果、茂木（註8）に移った人たちがいる。

註8 | 芳賀郡須藤村、現・茂木町大字生井（『ふるさと生井抄 古老からのメッセージ』P49「生井姓を訪ねて」の章に詳しい。生井公民館発行 平成4（1992）年）

◎思川は、昔の資料を見ると江戸まで蒸気船が走っていた。裕福な家は、伊勢詣りや江戸へ出ていくのに、方々から来て生井に泊まって船で行ったと言う歴史もある。

◎学校の統廃合：もともと生井と網戸の部落があって、その後、農協の場所を境にして、生井は、上生井と下生井に別れた。自分たちの代まで、生井中学校に行ったが、昭和32,3年ごろに、間々田中学校に統廃合された。当時は、ずいぶん騒ぎになった。統廃合に反対していた家の子供は、大平や藤岡の中学校に行った人もいる。

◎生活圏：昔の生活圏が、当時はみんな古河。バスもあったから、何かの買い物というのは、みんな古河へ行っていた。

1-2 水害の歴史

◎昔の生井村というのは、川沿いに細長い。思川と与良川と巴波川に挟まれて、水害が多い特殊な地区。遊水地があったために南側の交流は無かった。

◎水害にあうと（古河への）バスが止まり、1週間くらいは孤立した。

◎昭和16（1941）年の台風による大水では、大きな被害が出た。胸形神社（むなかた神社・寒川地区）も床上浸水だった。戦争が終わった後、昭和22年のカスリーン台風でもさらに大きな被害。今は、渡良瀬遊水地（ラムサール/コウノトリ）で騒がれているが、当時は、渡良瀬遊水地は、大水のたび他の地域との交通を遮断される不便さを感じる象徴。

◎堤防が切れたところは「決壊の碑」がある。カスリーン台風で切れたところ、47本の桜を植えている。決壊したところが大きな沼になる。

◎大雨の時、道の駅の北側の美田（みた）中学校のグラウンドの水が少し溜まるくらいなのに対して、生井では場所によって2階の近くまで水が来ていた。高さが何メートルも違う。防災マップができてから、それが本当の話だと認識できた。それほど大水になる地域だから、昔から、次男などは、結局は生井を出て野木や間々田に行ってしまう。人口が減ってしまう理由で、昔から共通なものは、水害。

◎乙女橋を渡って乙女や間々田、黒田辺りは、台風の時でも雨のことはあまり心配しない。農家でハウスをやっている人も多いから風の心配ばかりしている。ずいぶん感覚が違うものと思った。

1-3 養蚕の歴史

◎養蚕：私で13代目ぐらいの農家だが、明治期は養蚕もやっていた。秩父や八王子も産地だったが、山間部や畑地で、化学肥料もなく次第に病気

で衰退して、生井の方が盛んになったようだ。生井は川沿いなので、クワに病気が出ても、水害で水をかぶれば菌が流されるから丈夫だったようだ(註9)。生井からワタナベさん(註10)という人が、絹を(要確認)パリの万国博覧会に出品(註11)したと聞いている。そういう歴史も旧思川と一緒になくなったように思う。

◎クワは、遊水地でも採れた。うちでも4ヘクタールぐらい桑園を持っていて、当時は栃木市や茂木から出稼ぎに来て、養蚕をやっていた。養蚕業、そして次に種屋、蚕種業が盛んになった。横浜に輸出した(横浜港から欧州に輸出)商社もあった。昔の地図を見るとほとんどが桑園だった。生井地区は多かった。

 註9:「桑は水をかぶると泥をかぶり硫酸カリを十分に含むのでいい桑ができた」(『ふるさと生井抄 古老からのメッセージ』生井公民館発行 平成4(1992)年、田村喜十郎さんへの聞き取り P80 より転載)

註10: 明治期の生井村の蚕種家、渡辺彦四郎氏と思われる。小山市史編纂専門委員会編『小山市史研究2』P 50 等に記載あり。また同資料の「蚕卵種製造業」町村別人名表)には下生井村の渡辺常五郎など、渡辺姓の蚕種家5名の名前がある。

註11: 出品の記録は探せなかったが、当時、生井村の蚕種家たちの活躍の記録が、註2と同じ『小山市史研究2』の「明治期における下都賀郡小山地区の養蚕業の位置—生井村蚕種業を中心に—」に残る。明治17年、明治政府が行った蚕病の検査技師養成の講座を受講した県内の蚕種家10名のうち5名が生井村、1名が網戸村の者であった。養蚕法においても、生井村の蚕種家たちは「古い伝統の上に明治初年以來、近代的な蚕育法を積極的に導入し、蚕種輸出衰退以降新しい展開に対応して、同村蚕種業の発展基盤を形成せんとした」とある。(P59)

1-4 農業の歴史

◎圃場整備: 昭和46年に水田の整備事業がしま

った。堤防が決壊してできた大小の沼や桑園の景色がかなり変わり道路もまっすぐになった。

◎圃場整備・土地改良の頃、農機具がいろいろ世の中に出てきた。それまでは、牛馬で農耕していた。遊水地は、牛馬の餌場にもなった。餌場として草を刈り、あとは肥やしにした。遊水地は生業や暮らしに様々に利用した(後述)。

2: 生井の良さ~大切に守りたい地域の宝

2-1 遊水地のヨシ

◎昔は遊水地を、いろんなこと利用した。

冬はヨシ刈りと魚とり、夏は真菰(マコモ)でお盆のゴザをつくる。

◎昔は、地域ごとの集落で(ヨシを刈っていいという)権利を持っていた。区割りして競争入札して、年間500万くらいで買った。自治会で管理して売れたら自治会の収入になった。

◎白鳥では早い時から、日の出祭りと同じ6つの組で遊水地を借りて、ヨシを刈った。今も、もったいないから権利は一部残してある。ヨシズだけではなく、夏は、真菰を刈って周りの青いところを干して、それでお盆さまのゴザ(註12)をつくる。東京にも売れた。

◎今は、生井地区の人でも、遊水地の関わりは、とても薄くなっている。下生井の一部の人たちが、30町くらいで麦をつくっているくらい。ヨシズ屋さんも1人になった。

 註12 | 下生井小学校郷土クラブ編『私たちのふるさとしもなまい風土記』(昭和61年9月発行) P39より

「盆ゴザ お盆様になると各家庭では盆棚を作り先祖の霊をお迎えする風習が古い時代から行われています。この盆棚に盆ゴザを敷きその上に御供物を載せるのです。盆ゴザの原材料は、遊水地の中や与良川のほとりに自生しているマコモという水生植物です。このマコモを鎌で刈り取り天日で乾燥させ編み上げたのが盆ゴザです。現

在白鳥地区では何人かの方が盆ゴザ編みをしています。出来た物は近在はもちろん京浜地区にも出荷され、お盆飾りにはなくてはならないものになっています」

2-2 生業と生活が水辺とともにあった歴史

◎生家は醤油、酒や醤油、お菓子を売る店をやりながら農業もやっていた。渡良瀬遊水地は、魚とりやヨシ刈りによる地域住民の収入源だった。渡良瀬遊水地があることで生活がいくらか潤った。◎沼もぽつんぽつんとあったので、そこにも魚がいて、冬になると魚にとって商売にしている人がいた。川魚屋も何軒もあった。フナ、コイ、ウナギ、ナマズ、ザッコ、食用のウシガエル。昔は雷魚もいた。

◎家の裏が旧巴波川で、たまり水があって、夜になるとウシガエルが鳴く。近所には、ウシガエルを取って販売して、生業にしていた人もいた。

◎やはり、小学校の頃から魚釣り、魚採り(註13)

◎魚を捕まえるための道具も工夫していた。

◎ウナギにとって売りにいく。何匹とった、200円もらった、と、学校に行って自慢比べ。

◎ウナギは、置き針に、ミミズをつけて取った。ミミズは、遊水地の、できたばかりの堤防のところに、ウタベベ/ウタミミズと言って、太いミミズがいた。学校が終わると、まず、そのエサをとる。国交省の職員に見つかると怒られる。

◎ウナギ30匹ぐらいとったこともあった。今では考えられない。農薬を多く使うようになって、ばばっといなくなった。昔は、魚は豊富だった。遊水地から、田んぼの水路にも入ってきていた。

◎昔は、他にも、ベーゴマとか、いろいろなことをして遊んでいた。

註13 | サークルわかば編『なまいのくらし』(平成12年発行)には「さまざまな釣りの工夫」として、昭和20年～30年代の聞き書きが多数掲載されている。

◎圃場整備が始まった頃から、今まで魚がいた水路もコンクリートになって、棲めなくなった。次第に生き物がいなくなった。魚をとって収入が得られたのは、昭和46年ごろまでだったと思う。

◎土側溝もほとんどなくなっている。これは余談だが、コウノトリのエサの件もあるので、土地改良を元へ戻せばいいんじゃないかと話したことがある。昔の面影は、私もまだ記憶があるから。

◎水路がコンクリートになったことと、排水機場を作ったから遊水地だけではなく、水路の水位も下がったから生き物が減った。調整池辺りは、今はセイカタアワダチソウやツルクサなどが増えているが、昔は、ジメジメした湿地で、子供の頃にいくと、ちよつとの雨でぬかるんでいた。

◎戦争中も班があつて、いろんなことを助け合うことが奨励された時期が3年ぐらいあった。草取りが遅れたりすると手伝いに行かされた。

3: これからの地域の課題

3-1 子どもたちの地域での学び

◎今は地域の子どもたちが地域のことをあまり分かってない。遊びと同時に、地域を知るための教育も必要。学校で有名な神社とか歴史は教えるだろうが、自分の生まれた地域をもっと詳しく知ってもらいたい。どこに神社があつて、この神社は、どういうあれでどういう人を祀ったとか。大人になったら用事がないと行けないようなところも、子どもの頃は入っていける。それで自分たちも、自分の地域だけではなく近隣の地域のことを知った。

◎当時と今の違いは、今では子どもたちが悪いことをしても、怒らない、怒れない。危ないことをして怪我すると、昔は、はたかれたり怒られたが、そうやって育ってきたのは経験になっている。

◎今の子どもたちは公園でボール遊びをしているのは見かけるが、他の遊びはわからない。パソ

コンとかゲームではないか。

◎今は、ほとんど魚とりの遊びはしてないな。

◎小学校から依頼されて老人会で子どもたちにいろんな遊びを教えた。コマ、ベーゴマ、馬乗り。子どもたちは、初めての遊びを楽しんでいた。このまま継続していくべきとは思っているが。

◎小学校の田んぼ体験も続けたほうが良い。

3-2 ふゆみずたんぼ

◎2012年ごろから、無農薬、無化学で米作りをやってみないかと前市長に勧められて、取組み始めて10年近くになるが、口で言うほどにはうまくはいかないのが現状。薬を使わないと、どうしても草が生える。今は、2000円くらいの薬を使えば一発で除草できる時代だから。

◎そう言う努力があって、エサがあるからコウノトリが来てくれているが、職員も、土曜も日曜も休めなくて大変だったと思う。

3-3 地域社会の存続

◎地域を残していくというのは、考えると非常に難しい。特にコロナがあるから、お祭りも中止、太鼓も中止で、その間に世代交代があったり、農業を辞めていく人が出る。農業を辞めると、その地域に住む必要がなくなる。

◎工業団地の造成で、田んぼを手放して売る人も。

◎昔に比べると、よくも悪くも、個人の権利が主張されすぎている。昔は、村の世話役をみんな信頼して、よくまとまっていた。

◎年長の人たちが、地域のことをよく考えてくれていて「こうしていくよ」と言えば、それを信頼して協力していたもんだ。

◎今は、家族制度も崩れちゃったから、うちの中もバラバラになったように思う。

◎そういうことが結構ある。消防の問題も。昔は

結構みんな協力してやっていたが、今はもう団員になる人がいなくて、自治会長が大変なようだ。

◎消防にしても、家庭の中で「今度は誰々はやったほうがいいぞ」など話してくれるといいと思う。

◎親子でも難しいが、家の中でも教育は大事だ。

◎われわれの時代とまた違うから、お祭りごとも強制してやらせるわけにいかない。

◎祭りや神社のしきたりなどは残していくのは大事だが、受け継ぐ子供たちの負担になっても行けないから、難しい。

◎日の出祭りは、やめたい、継続できないという声はあまり聞こえてこない。

◎組を辞めたいと言う相談がないわけではない。自分たちの組の当番は何年後だと分かっているけど、いろいろその時の生活の事情も、浮き沈みもあるから。できないなら、俺がやろうか、など、仲間同士で相談しながらやれることもある。

◎それなりに今も実施はしているが、内容は今の時代に即して縮小しながらやっている。お祭りは寒い時期なので、火を焚きながら、集まる地域の人たちといろいろな話ができる、話が聞けるのは、やはり良いものだ。

◎何十年後かにまた、その時に合わせて改正となるかもしれない。

◎農村地帯だから、草刈りなど奉仕作業の人手不足も大問題。行政の補助金等をもらいながらやっているが、人手がなかなか集まらないのが現状。

◎人手がいれば少しで終わるところを2時間も3時間もかかる。それが重労働で大変だから、ますます人が来ない、悪循環。

◎草刈りや消防に比べて、祭りは、地域の大切なお付き合いと言う意識があるから集まりやすい面もある。奉仕作業は1年のうちに何回もあることが、負担が大きく感じる原因ではないか。

◎葬式も昔は地域総出でやっていたから大変だった。今は、業者任せ。

◎東生井、下生井では、葬式になると、朝6時に当番の人が鉦を鳴らして近隣に知らせる。

◎香典も「イッパンギリ」というのがあり、お返し無し。今年の総会で、それもやめようと無くした。

◎今はみんな葬儀屋さんが仕切るし、なんでも業者が用意してくれる。昔のように、地域で葬式をやるということは、集落の中でコミュニケーションとかいろいろなことを覚えていく、一つの社交場のようなものだった。親が早く亡くなったので、高校を卒業してから、そういうところへ出ていたから、昔のやり方の良さがわかる。今では人情味も薄れている。

4：今後の展望について

◎ずっと治水に力を入れてきた遊水地だったが、そこにコウノトリがきて、地域が明るく変化したことに本当に驚いている。これをうまく全国に発信していくように。ぜひそういう形でやってください。

◎遊水地は広々とした環境で残されると思うが、今後、だんだん開発されて農村地帯、水田地帯がなくなっていってしまうのではないかという心配がある。ゼロにはならないと思うが、せっかく土地改良もやってある場所だから、残したい。思川西部の田園地帯は、堤防に上がればわかるように、見渡す限りの田園地帯。米も余ってしまう時代でもあるから、どうなっていくかわからないが、この「青い土地」がなくなっていくようにしなければ。コウノトリについても、なぜここへ来たかと言えば、誰かが糸で引っ張ってきたわけでは無いから、この地域を選んできている。だから尚更、この地域の良さを残していかなければいけない。ただし、今後の農村地帯の担い手は減って、俺も辞めたい俺も辞めたいと言う状況になってしまえば、あつと言う間に草ぼうぼうで廃れ

てしまう。農業関係の人も一生懸命、今後どうするかを検討してくれると思うが、本当に考えていけないといけない。

◎今までずっと見てきたが、本当に小山市の職員が熱心。見守り隊の人たちも実績を作ってよくやってくれている。そういうバックアップがある。

◎お父さんとお母さんを中心に、隣近所の人と仲良くやるべきで、それを子供たちにも見せておくことが大事。親が隣の人とけんかしていれば、息子も嫁さんも隣の人と話さなくなってしまう。仲がいいことにはなんの問題もない。うちでは、それを細々と大事にしている。

◎基本は隣近所で仲良くすること。ここの生井は、隣が野木、こちらが栃木、藤岡。その地域も仲良く、従業員も職員も仲良く。そうでないと身動きが取れない。家族、地域、職員同士が仲良くやれば、今以上に盛り上がる地域になると思う。

◎小山市は人口もそれほど減少もしてないし、東京にも近いし、だからやはり、今はコロナで、我々地域も受け入れるのは難しいけれど、農泊とか、農村を活用して地域との交流を進めたい。

◎子どもの教育にも力を入れたい。交流館を作ってもらって、人は来ているが、ほとんどが年寄りのようなので、もう少し大きくした研修施設みたいなところを作って、地域の年寄りが子供たちに遊び方でも教える機会をつくるとか、夏休みなどに、都市部（小山の都市部や首都圏）との交流の自然塾などができないか。施設と遊水地を利用しながら、を利用しながら、それが地域の盛り上がりにもつながればいい。

3-2 アンケート調査結果（概要版）

全7問を設定して実施したアンケートについて、主要な設問の結果を概要版として掲載する。質問票と、単純集計の結果及び属性ごとの相関をみる集計の詳細版は別添資料「アンケート調査結果」に掲載する

◎回収率：70%：577戸に配布し404通の回答。

1：回答者の属性について

1-1 調査結果：設問【1】

-1 性別

男性 65%	女性 27%
--------	--------

男性 263名、女性 110名、無回答 31名

-2 年代

70代以上 44%	60代 31%	50代 15%	他 10%
--------------	------------	------------	----------

20代 1名、30代 10名、40代 15名、50代 59名
60代 125名、70代以上 180名、無記入 11、無効 3

-3 職業（兼業農家の方は複数回答可）

その他	115	27%	公務員	6	1%
会社員	77	18%	団体職員	4	1%
農業（専）	54	13%	学生	0	0%
農業（兼）	54	13%	無記入	33	8%
パート・バイト	44	10%	無効	1	0%
自営業	36	9%			

◎兼業農家の複数回答

他の職業を記入した人は54名中18名

◎その他115名の内訳

無職 64 主婦 8 年金生活 3 会社役員 4

大学非常勤講師 1 整備 1 非会社員 1 無記入 33

-4 所属自治会>別添資料に掲載

-5 地域活動の経験>別添資料に掲載

-6 生井地区との関わり

生まれも育ちも生井 A 44%	B 12	C 11	D 9	E 7	F 7	G 3
--------------------	---------	---------	--------	--------	--------	--------

A 生井で生まれ一度も地区外で暮らした経験が無 178名

B 就職で出て数年前に戻った 48名

C 栃木県外で生まれ育ち生井へ 46名

D 小山市の他地区で生まれ育ち生井へ 37名

E 栃木県内の他市町で生まれ育って生井へ 29名

F 進学と就職で外に出て数年前に戻った 26名

G 進学で外へ出て卒業後に戻った 13名

・無記入 22名、その他 1名

1-2 回答者の属性について

以上の結果より、主たる回答者像は、「生井地区で生まれて住み続けておられる60歳以上の男性」であり、自治会や消防など地域活動の経験がある方々であると言える。

回答者は、男性65%女性27%という内訳となったが、実際の生井地区に居住する方の男女比はほぼ等しい（註1）。また、回答者の年代別の内訳の90%を50代以上が占めている。生井地区に居住する方の年代ごとの人口比のデータは未入手であるが、やはりバランスに差異が出ていると考えられる。結果からの考察等において、その点も考慮し、次回からのアンケート調査方法では、幅広い年代から回答を得られるような改善を検討したい。

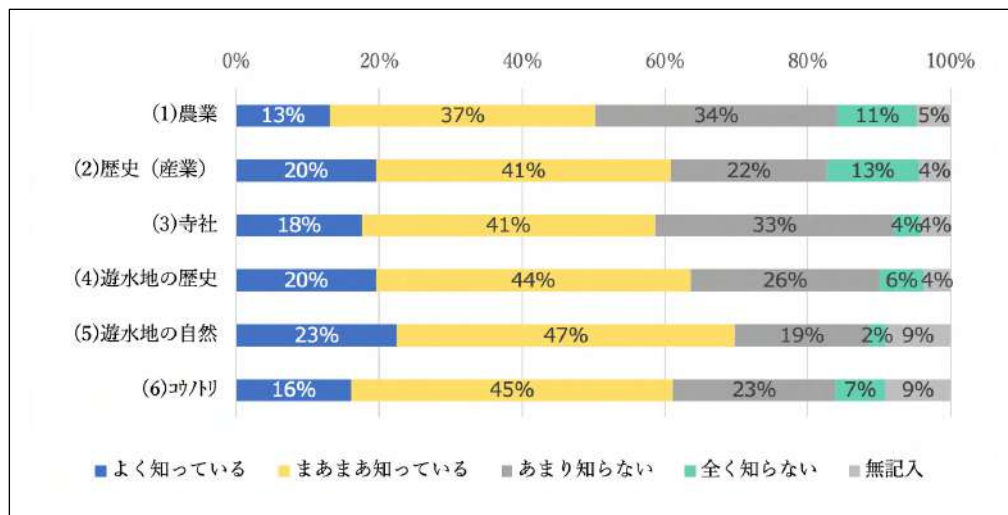
註1 | 令和4年2月1日の「大字町丁目別世帯数および人口推計表」によると、生井地区1677人中、男性830人、女性847人（小山市ホームページ小山市統計情報より）

2：生井地区の歴史や地域資源に関する認知度・関心度

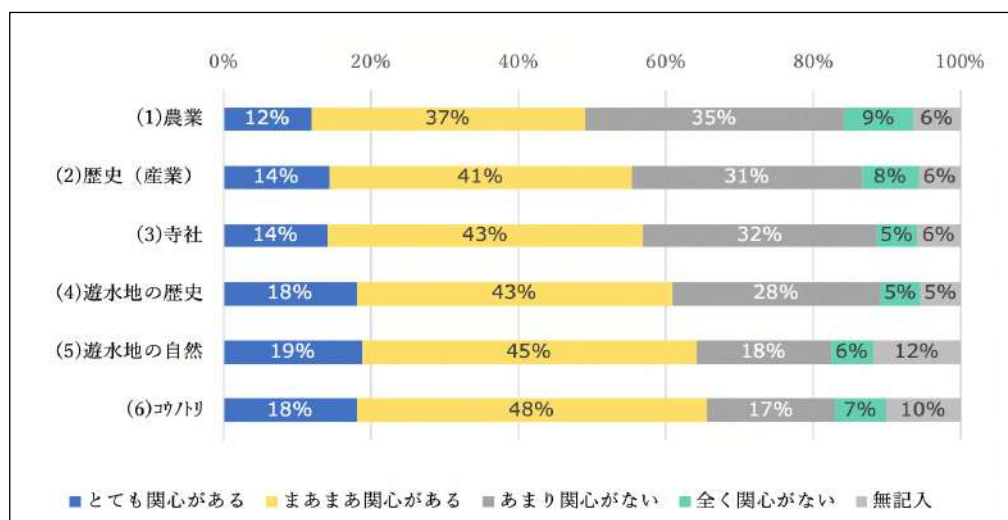
2-1 調査結果：設問【2】

右下記の6項目について「知っている」「関心がある」の割合を4段階の選択肢で尋ねた。

A：認知度（知っているかどうか）



B：関心度（興味関心があるかどうか）



- (1) 生井地区で行われている農業について、どんなものがどんな規模や形態で生産されているかについて
- (2) 生井地区は明治時代に蚕業伝習所が作られるほど養蚕が盛んで、水運の拠点でもあったことを
- (3) 近隣の神社や寺の歴史、由緒、祭りなどについて
- (4) 生井地区が隣接する渡良瀬遊水地誕生の経緯（足尾鉍毒事件や谷中村の歴史を含む）について
- (5) 渡良瀬遊水地は2018年に国際的に重要な湿地の基準にあるとして「ラムサール条約湿地」に登録されました。このような遊水地の自然環境について
- (6) 渡良瀬遊水地に飛来しているコウノトリの出身地や生まれたコウノトリの名前や家族について

2-2 年代での差について（巻末資料Vより）

回答の75%を占める60代70代の回答がそのままこの結果と重なるが、どの年代でも関心度は（コウノトリ＞遊水地の自然＞遊水地の歴史＞自社・昔の産業・農業）という順である。

30代40代（25名）の回答では、コウノトリへの認知度は高いが、遊水地の歴史や自然への認

知度は低い（「よく知っている」がゼロ名）。ただ、7割8割の回答者が、遊水地の歴史や自然への関心はある、と解答している。

生井地区での農業については、高年齢グループより認知度は低いですが、30代の10名中4名が「とても関心がある」、3名が「まあまあ関心がある」と回答している。

3：渡良瀬遊水地コウノトリ交流館について

3-1 調査結果：設問【3】

(1) 認知度

知っている	知らない	無
299名 74%	69名 17%	記入

(2) 訪問経験（知っている 299 名への質問）

行ったことがない	1回	2回～	無
195名 65%	59名 20%	43名 14%	記入

(3) どのような訪問か

（1回以上行ったことがある 102 名への質問）

家族で訪問した：38名

ひとりで訪問した：34名

生井地区内の友人知人と訪問：19名

生井地区外から友人知人が来て案内した：17名

学校や職場の研修で：2名

その他・無記入：11名

(4) 交流館の事業について

重要性について、6項目について、それぞれ3つの選択肢で尋ねた。

回答人数	①遊水地	②コウノトリ	③エコツーリズム	④環境学習	⑤有料貸出	⑥土産試験販売
■さらに充実させるとよい	192	184	96	142	83	114
■わからない	92	90	165	131	167	131
■あまり必要性を感じない	16	25	34	22	45	48
■無記入	104	105	109	109	109	111
合計	404	404	404	404	404	404

①遊水地に関する展示 ②コウノトリに関する展示 ③エコツーリズム ④環境学習

⑤スペースの湯量貸出 ⑥お土産品の試験販売

(5) 交流館の活動についての自由記述

41件の記述回答があった。内訳は、必要性や効果を疑問視する意見が7件、立地や広報についての意見や提案が10件、活用法についての要望や提案などが24件。具体的な提案をいくつか紹介する。全文は別添資料「アンケート調査結果」に記載している。

◎立地条件が悪く地元の住民も行きづらい。何をやっているのかわからない。まず、地元の人

たちを招き入れるイベント等が必要。

◎過疎化対策の一環として、都会との交流の場に有効に使う。

◎生井地区の歴史の珍しい物等を小冊子に編集・紹介し販売したらよいのでは。

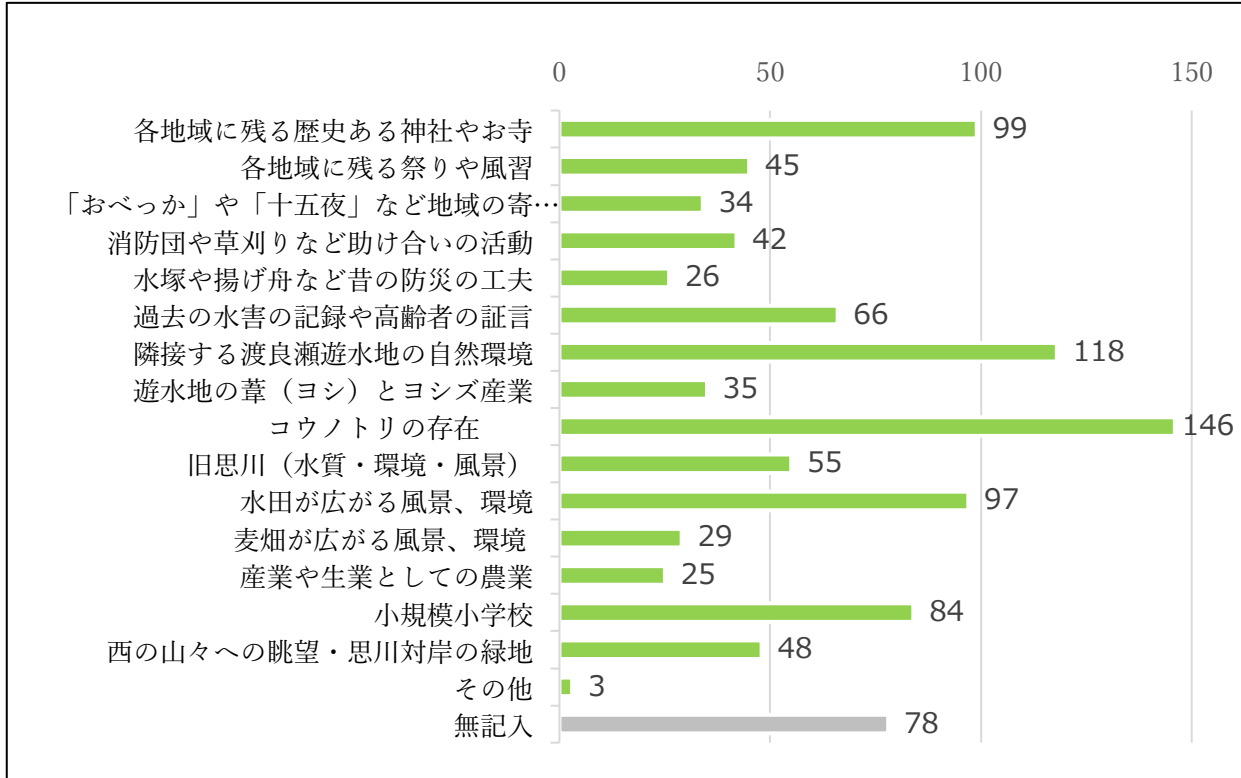
◎谷中村が廃村となったこと、北海道の開拓で辛い思いをした人々のことなど現在の遊水池ができるに至った経緯を広く伝える方策を。

◎展示や紹介だけではリピーターを呼び込めない。イベントや発表、行事、祭などの再興と食堂などの休息施設、その土地でしか手に入らない食品や土産品などの総合的なプランと実行。

4：生井地区で大切に守っていききたいと考える「小さな自慢」

4-1 調査結果：設問【4】

グループインタビューでのお話を参考に 15 の選択肢を作成し、3つを選択する設問とした。



4-2 属性での差について（詳細は別添資料）

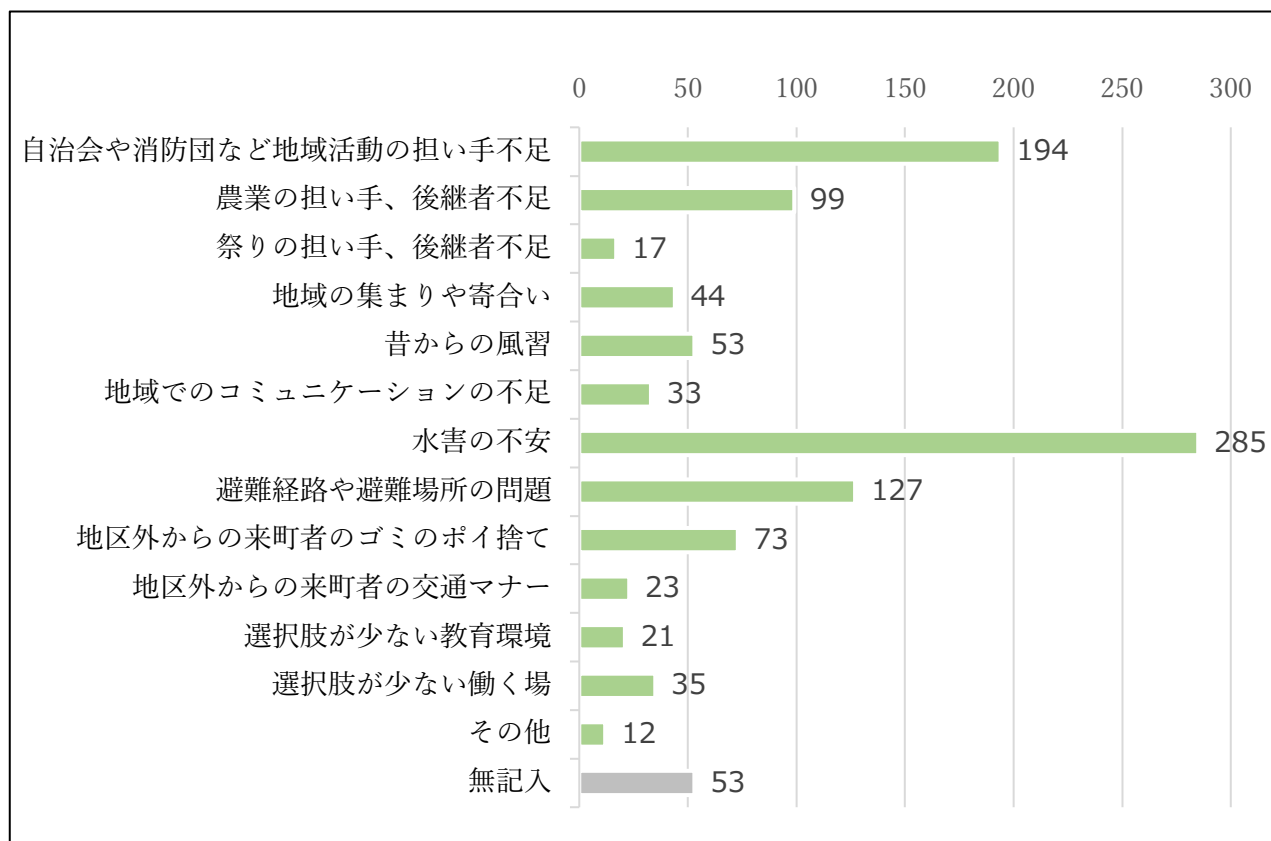
総合（上グラフ）	農業従事者（108名）	非農家（296名）
1 コミュニティの存在	1 コミュニティの存在：43	1 コミュニティの存在：98
2 遊水地の自然環境	2 水田が広がる風景・環境：34	2 遊水地の自然環境：82
3 各地域の神社仏閣	3 遊水地の自然環境：31	3 各地域の神社仏閣：65
4 水田が広がる風景・環境	4 各地域の神社仏閣：26	4 水田が広がる風景・環境：61
5 小規模小学校	5 水害の記録や高齢者の証言：23	4 小規模小学校：61

30代 40代（25名）	50代（59名）	60代 70代は総合と同じ順位
1 コミュニティの存在：13	1 コミュニティの存在：24	他、地域活動参加の有無、生井地区との関わり（生まれてずっと生井、Uターン、転入者など）での相関も見ているが、差異は見られない
2 小規模小学校：10	2 遊水地の自然環境：18	
3 各地に残る祭りや風習：8	3 水田が広がる風景・環境：17	
4 水田が広がる風景・環境：6	4 小規模小学校：14	
5 ヨシとヨシズ産業：4	4 各地域の神社仏閣：14	
5 隣接する遊水地の自然	4	

5：生井地区で「無くしたい」「解消したい」「解決したい」と考えること

5-1 調査結果：設問【5】

グループインタビューでのお話を参考に12の選択肢を作成し、3つを選択する設問とした。



5-2 属性での差について（詳細は別添資料）

総合（上グラフ）	農業従事者（108名）	非農家（296名）
1 水害の不安：285	1 水害の不安：78	1 水害の不安：197
2 担い手/後継者不足:194	2 担い手/後継者不足:68	2 担い手/後継者不足:116
3 避難経路や避難場所：127	3 農業の担い手/後継者不足：44	3 避難経路や避難場所：91
4 農業の担い手/後継者不足 99	4 避難経路や避難場所：30	4 地区外からの訪問者のゴミ：52
5 地区外からの訪問者のゴミ:73	5 地区外からの訪問者のゴミ:17	5 農業の担い手/後継者不足：50
6 昔からの風習:53	6 地域でのコミュニケーション不足：11	6 昔からの風習：42
30代40代（25名）	50代（59名）	60代70代は総合と同じ順位
1 水害の不安：17	1 水害の不安：43	属性により差異が出るのは「昔からの風習」（「おべっか」などの寄合や葬儀などのしきたり）。世代が若いほど「無くしたい」ものとして認識されている。
2 地域活動の担い手～不足：13	2 地域活動の担い手～不足：24	
3 昔からの風習：9	3 昔からの風習：16	
4 地区外からの訪問者のゴミ:6	3 避難経路や避難場所：16	
5 避難経路や避難場所：5	4 地域の集まりや寄合い：15	
5 訪問者の交通マナー：5	5 農業の担い手/後継者不足：12	

地域活動の経験なし（72名）

- 1 水害の不安：36
- 2 無記入：27
- 3 避難経路や避難所：13
- 3 地域活動の担い手～不足：13
- 3 農業の担い手～不足：13

地域活動の経験あり（332）

- 1 水害の不安：154
- 2 地域活動の担い手～：123
- 3 避難経路や避難場所：74
- 4 農業の担い手/後継者不足：55
- 5 地区外からの訪問者のゴミ：39

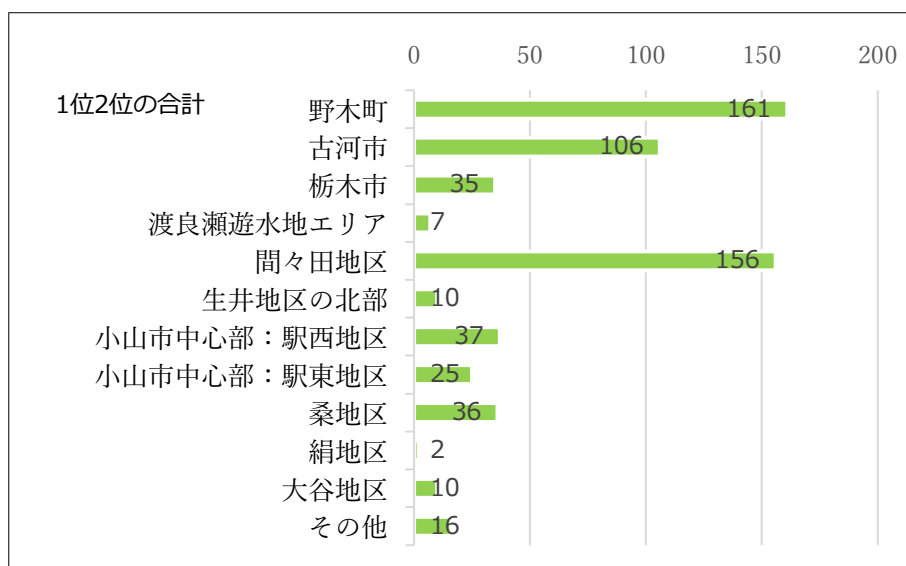
他に、生井地区との関わりにおいて、①生まれてずっと生井 ②一度外へ出て U ターン ③小山市内の他地区から ④小山市外(県外も含む)・・・という属性ごとの相関を確認したが、どのグループも総合の順位と差がない。

ただし、④小山市外(県外も含む)のグループでは「避難経路や避難場所の問題」を選んだ人の割合が、他グループに比べ特に高くなっている。

6：通勤や通学以外でよく出かける地域（2つ選択）

6-1 調査結果：設問【6】(2)

グループインタビューでのお話を参考に 11 の選択肢を作成し、1位2位を選択する設問とした。



- 出かける目的
(複数回答可)
- 1 日常の買い物：406
 - 2 食事や宴会：131
 - 3 病院：124
 - 4 特別な買い物：94
 - 5 友人や親戚に
会いにいく：58
 - 6 映画や演奏会など
文化的な催し：26

7 小山市の都市部に暮らす人たちへの希望や、呼びかけたいメッセージ

7-1 調査結果：設問【7】

田園地帯である生井地区に暮らす皆様から、小山市の都市部に暮らす人たちへの希望や呼びかけたいことがありましたら・・・と、自由記述で尋ね、75名から76項目の回答があった。

内容による分類と数は下記のとおり。

1	都市部に暮らす人へのメッセージとして	
	1	自然環境と農業の魅力を伝えるもの：28
	2	訪問マナーの改善を訴えるもの：8
	3	不便さと良さの両方があること：5
	4	水害の不安について：3
	5	小規模校のよさ、存続について：2
2	行政への提案や要望として書かれたもの	
	1	交通の不便さなどについて：10
	2	生井地区のPRや教育への活用について：5
	3	遊水地や旧思川について：4
	4	少子化・若年層の流出について：3
	5	都市部と地域間の格差について：2
	6	そのほか：1
3	生活の中での不安や困りごとを訴えるもの：5	

記述された文章については、別添資料のアンケート結果報告に全文を掲載している。グループインタビューでも語られていた、生井地区/渡良瀬遊水地のこれからに向けての提案や展望などとも共通する意見も多々あった。いくつかの例を下記に紹介するが、次項「4 調査結果のまとめと考察」でも触れる。

一部を紹介（原文ママ）

◎遊水地のボランティアガイドをしていて、子供たち（小3～4）に聞くと来たことがあると答える子供は4～5人（30人の内）知る→訪れる→好きになる→保存。まず遊水地を知る。美味しい米を知る。歴史を知るから始める。また子供達が再度訪れたいような場所と施設の整備が急がれる（ぜひ防災についての教育の場として各所連携していきたい）

◎思川をはさみどうしても小山以外の他の地区と思いがちになっていると思う。思川の東地区の発展が進みすぎている。昔は昔ながらの考えで別の地区と考えられている。やはり小山市の各地区のアピールが各々これからは必要になると思います。

◎私は農家ではありませんが農家のみなさんや農作物も国の大切な財産だと思っているので同じ小山市の住民として、そのことを大切に思っただけで幸いです。

3-3 個別聞き取りの結果

アンケート調査とグループインタビューの結果を踏まえて、生井地区の歴史的な把握を進めるために、70代の2名の方にお話を伺った。

3-1 Aさん：白鳥地区(令和3年1月17日)

-1 地域の歴史を記録して残していく活動

生井地区の聞き取り記録集「なまいのくらし」(平成12年3月発行)を企画・制作した、サークルわかばの一員。サークルわかばは、下生井小家庭教育学級の卒業生で結成され、さまざまな地域活動に参加してきた。下生井小の教頭で教育長になった、菅沼基訓先生が「地域のことに関心があるなら、自主学級を作ったら？」と助言してくれた。新橋初江さんにいろいろと教わりながら記録集の制作を進めた。

「地域のことを何でも記録して、次の世代に伝えていこう」という意識でこの取組みを始めた。

-2 下生井小学校の生徒に「養蚕」を伝える活動

3年生を対象に、「蚕から絹糸を作る授業」を15年間手伝っている。地域の過疎化が心配で、生井地区が桑・養蚕で知られていた地域だったことを伝え、子供たちに、地域の良いところを見出してもらいたい、という気持ちで続けている。話を聞くだけでなく蚕の世話をすることで、昔の人の苦勞への理解も深まると良いと考えている。

下生井小の良さ、家庭的なところは15年間、変わっていない。子供たちはみな素直で、高齢者に優しい。階段を降りようとすると手を差し伸べてくれたり声をかけてくれたりする。生井

地区は三世代同居の家も多いので、核家族が多い地域より、子供たちの「気づき」が多いのではないか。

蚕は、桑の葉を年中あげないと大きくなならない。調整池の土手へ桑を摘みに行き、熱中症になりかけたこともあった。また、大きな蚕は強くて、余計にエサを食べようとし、小さな蚕に桑の葉が行き渡らないこともある。子どもたちには、小さな蚕にも餌の桑の葉が行き渡るような配慮が必要だということも教えている。それは他のことにも通じる教育になっているようだ。

子どもたちには、遊水地の桑で摘んだ桑の実でジャムを作って食べさせていた。桑の葉は蚕が食べ、実は人間が食べる。子供たちには「こんな生井は嫌だ」と思わせたくない。みんな生井に残って欲しい。出て行っても、生井は良いところだからと、帰ってきて欲しい。そういう気持ちで活動をしている。

遊水地の桑畑も随分と減ってしまったけど、実が川に落ちて運ばれるので、遊水地の方々に今も木がある。人口が減っているので継承は難しい。蚕を育てて繭を作って・・・という作業をやりたくない人が多い。

-3 生井桑摘み唄 保存会の活動

旧思川を閉鎖する時、櫓を立てたイベントがあり、頼まれて「生井桑摘み唄」を歌った。歌うだけではダメだと考えて、なぜ桑摘みに関する唄があるのかなど調べて文章を書き、読み上げてから歌った。教えてくださる80代、90代の方の元へ通って、聞き取り調査をして踊り(手踊り)を習った。93歳の方から「ぜひ、みんなに伝えてください」と言われた。

生井桑摘み唄保存会は、農協婦人部で作った。7.8人いたが、減って4.5人に。基本は一

人でずっとやっている。やり始めて途中で止めるのは、教えてくれた人たちに申し訳ない。蚕の作業のことをうたった民謡は、他には無い。

-4 水塚と水害

水害に備えて「揚げ舟」は我が家にも保存している。生井地区では、もともと高いところに住むが、さらに土盛りして家を立て、それより高く土盛りして蔵「水塚」を建てる。土盛りは、山砂を使う。自宅の裏は巴波川なので、家は3階建てにしている。

地域の人たちとも「ちょっとでも高いと被害が違うよね」と話している。地域の人たちとは、お互い、いろんな体験をして知恵を共有しあっている。気づきが増すし、隣近所、行ったり来たりして手伝い助け合う。その濃密な関係があって連帯感が増す。

-5 白鳥の祭り

白鳥八幡宮の「日の出祭り」は毎年旧暦の1月11日に開催。1534年に、部屋村と白鳥村の間をながれる巴波川に御神体が流れつき、川から引き揚げ神社に祀った。その祀った日に、毎年大祭を行ってきたという謂れがある。

祭りの開催は、当番の班で担当し、当家制で、順番に三日三晩、自宅を「宿」として祭りを執り行う。今は、当家制も無くなって負担も減った。若い人たちも「年寄りがいなくなっても、伝統だから祭りを残してつないで行ったほうがいいよね」と話してくれている。

*詳しくは、『ふるさとなまい抄 ―古老からのメッセージ』（平成4年、小山市立生井公民館）P83～。Aさんが「日の出祭り」について詳しい記録を記載している。

3-2 Bさん：上生井地区(令和3年1月19日)

敷地内に水塚が残り、地域の歴史に関心を持ち様々な文献を集め研究していた父が残した資料も引き継いでいる。

-1 水塚について

近所（上生井）にも水塚はあったが、上り下りが不便であるなどの理由から壊して更地にしてしまったところが多い。以前の調査（2000年）より減っている（註1）。それから20年が経過しているので、現状も調査した方が良い。

自宅前の家には、水塚と揚舟が残っている。その水塚は大正時代に作られたもので、家のものとは「つくり」が違う。（大正10年（1921）以前に建てられたことまでがわかっている）

（質問）「うちはもう壊すよ」といった情報交換は？

特に集まりや組織などがなく、そうしたやりとりは行われていない。

家では、水塚の蔵の土台の大谷石をとりかえる必要が生じた際、壊そうかとも考えたが、自分でDIYで改修して残した。屋根を葺き替え、壁を土壁から白壁に変えた。簡単に使える漆喰をクリーム状にした塗料を使い、木部も自然塗料で「古民家風」に塗装をして活用している。

（質問）塚の構造は？

土だけではないか。山がない地域だから、土手からしか土を採れない。自宅の水塚は、昭和22年（1947）9月のカスリーン台風来襲後、敷地南側の旧河道端にあった旧堤防を崩して盛土した。土留めは、この辺りに河原がなく石垣が積めるほどの石が手に入れないから（註2）、植物で行った。セキショウのようによく広がる植物が役立つ。

昔は土手もそれ程高くなかったので、水塚は避難所として大事だった（註2）。

-2 家と地域の歴史について

家は当地（上生井）で七代目を数える。東北から移り住んだと記録に残る。祖父は、旅館を買って営んだこともあった。

・蚕種製造業を営み、栃木県議になった碓井要作（下生井出身）は、河川改修、谷中村廃村問題に関して、田中正造とかかわりがあった人物。

・栃木県立博物館企画展図録「小山市の仏像」に、生井地区の仏像も記載されている。

・太平山道標が、新枡屋（下生井。旧思川右岸）脇の四つ辻にある。

・生井地区ではうまい米がとれる。水が染み出る場所があり、また掘り抜き井戸があったが、水量に恵まれただけでなく水質も稲作に合っているのではないか。

・生井地区は、小山市で一番土地が低いところで「台風が来ると冷や冷やしていますよ」と。水害を避けて地区から転出した人もいる。野木の松原橋の辺りに、この近所から移った人が多い。

・思川の旧乙女河岸付近に、日光方面へ運んでいた石鳥居が舟から落ちてそのまま沈んでいるという話がある。

註1：2000年の調査

Aさんも制作に参加した『なまいのくらし』（サークルわかば編：平成12（2000）年）には、調査結果が掲載されている。当時確認された水塚と揚げ舟の数は下記の通り。

【水塚】32：上生井6、下生井4、東生井7、白鳥15

【舟】総数44：上生井8、下生井6、東生井14、白鳥16

*補足として記載されている文章を転載する。

「かつて舟を持っていたと答えたのは34軒38艘でした。時期を限定した訳でも無く、データとしては参考でしかありませんが、舟がなくなった理由は、「使うことは無いから」が50%、「建物の立替えに伴い取り壊した」が28%、「その他」が22%でした。」

註2：風景社補足

思川、巴波川の河床勾配が緩やかで、河川水は径が数十cmある円礫を運搬できない。

註3：風景社コメント

COVID-19 感染拡大下に考えると、世帯ごとに避難の場所が確保できるのは防疫面でも有効だと言える。

資料B：名詞の頻出リスト上位 64 項目 アンケートの自由記述およびグループインタビュー（数字は登場回数） それぞれのリスト表示の最後の単語は、同点多数の場合、解析結果標の表示順に 64 で切っている。

アンケート自由記述				1 子育て世代				2 農業従事者				3 50代 60代				4 70代 80代			
地区	43	堤防	6	生井	58	コウノトリ	10	地域	46	川	10	昔	68	小山	11	生井	56	乙女	11
生井	35	地帯	6	地域	39	学区	10	地区	44	逆	10	自治会	32	お話	11	地域	41	生活	11
水害	34	工事	6	子ども	30	生活	10	農家	39	場合	10	遊水地	28	関係	11	昔	34	農村	10
地域	32	不便	6	昔	29	先生	10	生井	34	車	10	生井	25	最初	11	地区	28	市長	10
思川	17	マナー	6	学校	26	全部	10	農業	28	堤防	9	コウノトリ	20	わけ	11	遊水地	26	地帯	10
車	15	解消	6	地区	24	間々田	9	コウノトリ	25	麦	9	地区	20	土手	10	自治会	23	商売	10
自然環境	14	活動	6	網戸	22	川	9	機械	25	栃木	9	平田	18	お寺	10	堤防	22	班	10
農業	14	現在	6	世代	22	グループ	9	一番	25	イチゴ	9	地域	18	川	10	子ども	21	渡良瀬遊水地	9
豊か	14	生活	6	下生井	20	お母さん	9	地元	24	世代	9	全部	18	大変	10	水害	20	小山市	9
コウノトリ	13	学校	6	小学校	20	大人	9	お話	23	息子	9	タナゴ	17	上	10	土地	20	職員	9
自然	13	渡良瀬遊水地	5	乙女	17	皆さん	9	行政	22	娘	9	班	16	下生井	9	今度	20	管理	9
大切	12	戸地	5	中学校	16	関係	9	土地	22	お金	9	山	16	碓井	9	川	19	魚	9
不安	11	小山市	5	班	16	確か	9	今度	22	自治会	8	田んぼ	15	古河	9	学校	19	ネタ	9
遊水地	10	都市部	5	田舎	16	絶対	9	遊水地	20	草刈り	8	下	15	ワタナベ	9	隣	16	時期	9
田園	10	行政	5	仕事	16	小山市	8	問題	20	巢	8	思川	14	野木	9	大変	16	養蚕	8
道路	9	小山	5	おべっか	15	十五夜	8	上	19	市役所	8	舟	14	単位	9	網戸	15	間々田	8
ゴミ	9	風景	5	豊田	15	1年生	8	昔	18	小山	8	農家	14	車	9	神社	15	マツモト	8
環境	9	避難	5	地元	15	エリア	8	田んぼ	17	お米	8	小学校	14	右岸	8	農家	14	野木	8
必要	9	若者	5	わけ	15	自然	8	環境	16	祭り	8	子ども	14	小山市	8	駄目	14	田んぼ	8
住民	8	教育	5	車	14	辺	8	生活	15	経験	8	地元	14	神輿	8	下生井	13	交流	8
整備	8	不足	5	白鳥	13	当たり前	8	シラサギ	14	印出井	7	一番	14	水害	8	ヨシ	13	小学校	8
対策	8	安心	5	幼稚園	13	大変	8	白鳥	13	ハクビシン	7	渡良瀬遊水地	13	年代	8	小山	13	組	8
自治会	7	大変	5	結局	13	一番	8	野菜	13	アール	7	おべっか	13	先輩	8	一番	13	問題	8
綱	7	お願い	5	祭り	12	上	8	タヌキ	12	イノシシ	7	ツボ	13	嫌	8	子どもたち	12	真菰	7
空き家	7	着工	4	意見	12	友達	8	サラリーマン	12	えさ	7	近く	13	普通	8	会長	12	工業団地	7
若い人	7	草刈り	4	クラス	12	大丈夫	8	米	11	長男	7	コロナ	12	田中正造	7	お祭り	12	コウノトリ	7
年寄り	7	高齢化	4	実家	12	最近	8	子ども	11	考え方	7	お祭り	12	イケガイ	7	歴史	12	田園	7
毎年	7	土手	4	逆	12	自治会	7	状態	11	アキマ	6	歴史	12	ヤマネ	7	当時	12	ウナギ	7
場所	7	他県	4	親	11	水害	7	大変	11	田園	6	2日	12	水場	7	時代	12	藤岡	7
心配	7	大橋	4	下	11	農家	7	後継者	10	補助金	6	仕事	12	堤防	7	思川	11	茂木	7
問題	7	人口	4	遊水地	10	避難	7	土手	10	面積	6	消防	11	テニスコート	7	ミミズ	11	改良	7
消防団	6	施設	4	古河	10	独特	7	ハトムギ	10	若い人	6	カメ	11	ビン	7	栃木	11	おかげさま	7

4-2 資料 小山市地域別世帯数と人口の増減

国勢調査に基づく小山市統計年報掲載のデータを再構成した <https://www.city.oyama.tochigi.jp/site/toukei/list272.html>

世帯数の変化				世帯数の増減	
	平成17年	平成22年	平成27年	平成17→平成22	平成22→平成27
小山市総数	57,225	62,884	65,792	5,659	2,908
小山	20,202	22,791	23,791	2,589	1,000
大谷	14,003	15,923	17,061	1,920	1,138
間々田	8,983	9,578	10,325	595	747
生井	653	630	624	-23	-6
寒川	495	481	465	-14	-16
豊田	2,205	2,295	2,293	90	-2
中	756	772	780	16	8
穂積	1,881	1,882	1,787	1	-95
桑	6,545	6,984	7,191	439	207
絹	1,502	1,508	1,475	6	-33

人口の変化					
	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年2月1日
小山市総数	155,198	160,150	164,454	166,760	
小山	46,719	49,508	52,331	53,632	
大谷	35,473	38,051	40,441	42,438	
間々田	25,990	26,703	27,095	28,060	
生井	2,534	2,323	2,121	1,907	1,674
寒川	1,909	1,761	1,653	1,495	
豊田	7,833	7,644	7,407	7,086	
中	2,963	2,775	2,637	2,465	
穂積	5,083	4,952	4,679	4,258	
桑	21,013	20,938	20,953	20,678	
絹	5,681	5,495	5,137	4,741	

人口の増減数（増減率）					
	平成12年→17年	平成17年→22年	平成22年→27年	平成27年→令和2	
小山市総数	4952 3.2%	4304 2.7%	2306 1.4%		令和2年度の国政調査データを反映した統計は令和4年度4月に公表予定 増減率は、増減数を前回の人口で割った数値
小山	2789 6.0%	2823 5.7%	1301 2.5%		
大谷	2578 7.3%	2390 6.3%	1997 4.9%		
間々田	713 2.7%	392 1.5%	965 3.6%		
生井	△211 △8.3%	△202 △8.7%	△214 △10.1%	△233 △12.2%	
寒川	△148 △7.8%	△108 △6.1%	△158 △9.6%		
豊田	△189 △2.4%	△237 △3.1%	△321 △4.3%		
中	△188 △6.3%	△138 △5.0%	△172 △6.5%		
穂積	△131 △2.6%	△273 △5.5%	△421 △9.0%		
桑	△75 △0.4%	15 0.1%	△275 △1.3%		
絹	△186 △3.3%	△358 △6.5%	△396 △7.7%		

4-3 調査結果の再整理：テーマ別まとめ

ここでは、調査結果をもとに、生井地区の実情把握に重要だと思われるテーマを、下記のように6項目で設定し、簡易社会調査と文献調査から得られた内容の整理を行う。

- 1：生井地区の歴史上の特性
- 2：渡瀬遊水地は住民にとってどんな場所か
- 3：大切に守りたい「自然環境・風景・農業」
- 4：解消したい「水害の不安」「担い手不足」
- 5：地域コミュニティについて
- 6：暮らす上で大切にしている価値観について

1：生井地区の歴史上の特性*

(1) 江戸時代に河川交通の要所として発展

・東照宮の造営に使う物資の輸送路として思川が使用され生井地区対岸の乙女河岸で陸揚げされ、陸路で日光へ。「生井・網戸・乙女の三河岸として栄えた」

参考：阿部康夫氏（上生井）所蔵資料『江戸期における思川・巴波川の舟運と河岸』等

(2) 明治時代：養蚕業、蚕種業が発展

・県内の他の産地、絹村などと比して生井村の特質としては、荒糶家をはじめとした担い手たちが積極的に近代科学を学び生井村の養蚕・蚕種業に導入し、養蚕書の作成や優良品種開発を実現させ栃木県全体をリードしていたことが挙げられる。

参考：小山市史編纂専門委員会編『小山市史研究2』「明治期における下都賀郡小山地区の養蚕業の位置—生井村蚕種業を中心に—」

・グループインタビュー（50代60代）や個別聞き取り調査でも、荒糶角太郎、碓井要作などの名前が出され、若い世代にも伝えていくことの必要性が語

られた。

(3) 大正時代：初期に養蚕・蚕種業の急激な衰退

詳細は「グループインタビュー3_50代60代」のまとめ記録・註4に記載。衰退の原因について、小山市史編纂専門委員会編『小山市史研究2』では、大正元年に生井地区の桑園の大規模な買収があったことと、足尾銅山の公害問題対策として始められた渡良瀬川の流れを変える大規模な工事との関連について述べられている。

2：渡良瀬遊水地は住民にとってどんな場所か

(1) 認知度・関心度は高い。

渡良瀬遊水地の歴史、自然、コウノトリについて「(よく+まあ)知っている」「(とても+まあ)関心がある」どちらも61%~70%を占める。
アンケート設問【2】A認知度 B関心度

(2) 大切に守りたい「小さな自慢」である。

1位：コウノトリの存在（146票）

2位：遊水地の自然環境（118票）

12位：遊水地のヨシとヨシズ産業（35票）

アンケート設問【4】大切に守っていききたい「小さな自慢」は？
15の選択肢から3つを選ぶ設問

(3) 世代により会話での出現率に差がある。

グループインタビュー記録からのキーワード抽出による頻出名詞リスト（4-1資料）より。

「遊水地」50/60代（28回）>70/80代（26回）

>農業従事者（20回）>子育て世代（10回）

「渡良瀬遊水地」50/60代（12回）>70/80代（9回）

「コウノトリ」農業従事者（25回）>50代60代（20回）>子育て世代（10回）>70代80代（7回）

「ヨシ」70代80代（13回）>50代60代（6回）

(4) 世代による関わり方が大きく違う

過去：70代より上の世代にとっては、昔、遊水地や川沼は、収入源（ヨシやマコモ、魚類などの収穫と販売、加工）であり、生活や生業との結びつきが強かった。50代より上の世代にとっては、学校の帰りなどに立ち寄り遊ぶ場所でもあった。

現代：子育て世代（30代40代）になると、日常的な関わりは薄れてくる。グループインタビューでは、「海に行くことと同じような効果がある。広大な風景の中にひとりポツンとたたずみ、いのちの洗濯ができる場所」という発言もあった。

3：大切に守りたい「自然環境・風景・農業」

アンケート設問【4】大切に守っていききたい「小さな自慢」

15の選択肢から3つを選ぶ設問の結果を、4つの領域に分けて全体に占める割合を算出した。

自然環境 風景、農業 553 58.3%	渡良瀬遊水地の自然環境	118
	遊水地の葦とヨシズ産業	35
	コウノトリの存在	146
	旧思川（水質・環境・風景）	55
	水田が広がる風景、環境	97
	麦畑が広がる風景、環境	29
	産業や生業としての農業	25
	西の山々の眺望、思川対岸緑地	48
地域の コミュニティ 160 16.9%	おべっかなど地域の寄合	34
	消防団や草刈など地域の互助	42
	小規模小学校	84
歴史、風習 144 15.1%	歴史ある神社やお寺	99
	各地に残る祭りや風習	45
水害のこと 92 9.7%	水害の記録や高齢者の証言	66
	水塚や舟など昔の水防の工夫	26

*その他 3

大切に守りたい生井地区の小さな自慢としては、自然環境、風景、農業に関する項目で5割を超える。

グループインタビューの聞き取り内容をもとに、選択肢として提示した項目が多めであったことを差し引いても、やはり「大切な自慢」という認識の高さが伺える。

【風景社コメント】生井地区の地形的な特徴と継続される「農業」によってもたらされる「風景」。渡良瀬遊水地の「自然環境」と遊水地や農業に依拠した「コウノトリの存在」については、切り離して個別に考えていくのではなく、関係性を踏まえながら、今後の地域のあり方を考えていく必要がある。

4：解消したい「水害の不安」「担い手不足」

アンケート設問【5】無くしたい、解消したい、解決したいと考える「困りごと」。12の選択肢から3つを選ぶ設問の結果を、5つの領域に分けて全体に占める割合を算出した。

水害 412 41%	水害の不安	285
	避難経路や避難場所の問題	127
人口減少 高齢化 310 30.9%	地域活動の担い手不足	194
	農業の担い手・後継者不足	99
	祭りの担い手・後継者不足	17
地域の コミュニティ 130 12.9%	昔からの風習	53
	地域の集まりや寄合	44
	地域でのコミュニケーション不足	33
来町者マナー 96 9.6%	来町者のゴミのポイ捨て	73
	来町者の交通マナー	23
教育・雇用 56 5.6%	選択肢が少ない働く場	35
	選択肢が少ない教育環境	21

*その他 12

人口減少/高齢化に伴う「担い手・後継者不足」の問題は、消防団、地域の草刈りや祭り、農業において深刻なものとなっていることが、グループインタビューでも語られていた。

他地域と比べての人口減少の実数値を確認するために、国勢調査に基づく小山市統計年報掲載のデータを再構成した表を作成した(前項4-2 小山市地域別の世帯数と人口の増減)。生井地区の

人口減少率は、平成12年から22年は8%台。平成22年から27年で10.1%、平成27年から令和2年では12.2%と、年々減少率が増している。穂積地区や絹地区も減少率が増しているが、10%は超えていない。

【風景社コメント】

水害については、その不安の解消や防災・減災への希望が4割を占める。一方で、前出のアンケート【4】の回答で、水害の記録や証言、昔の水防の工夫の知恵などへの関心が低い(9.7%)結果になっていることにも留意したい。

5：地域コミュニティについて

ここでは、地域と人、人と人の関わりに焦点を当て、調査結果を整理する。◎印は、グループインタビューでのコメントの要約。

(1) 生井地区の人と人のつながり

子育て世代のグループインタビューでは、生井地区は「人と人の確かな繋がりがあり、安心して暮らせる地域」とであると語られている。

【子育て世代のコメント】

◎中学や高校に進学して、街中で育った人たちは、生井出身の者より「仲間を守る・庇う」という意識が薄いと感じた。生井出身者は、大人になっても同級生の仲間意識が強い。

◎他地区から移り住んだ。子供と散歩をしていると知らない人でも声をかけてくれる。安心して子育てがしやすい地域という印象。

◎幼稚園も小学校も小規模だからこそ、目が行き届く。手厚い安心感がある。

◎生井は、人の協力がある。地域で「一つの目的に向かう力」があると感じる。

(2) 地域の寄合、互助活動について

前ページに掲載したアンケート結果の表から、地域での関わりに関する項目を抜き出すと、伝統的な地域の寄合(おべっかなど)は、大切に守りたいという声も、(負担となり)無くしたいという声もある。

大切に守りたい地域の自慢

地域の コミュニティ 160 16.9%	おべっかなど地域の寄合	34
	消防団や草刈など地域の互助	42
	小規模小学校	84

解消したい困りごと

地域の コミュニティ 130 12.9%	昔からの風習	53
	地域の集まりや寄合	44
	地域でのコミュニケーション不足	33

「地域の寄合」と「コミュニケーション不足」について、別添資料アンケート集計結果(属性との関連P36~P41)より年代別に回答数を整理する。

	おべっか等の寄合は大切に守りたい	集まりや寄合は無くしたい	コミュニケーション不足を解消したい
30代	0/10	2/10	1/10
40代	2/15	2/15	0/15
50代	6/59	15/59	2/59
60代	11/125	18/125	10/125
70代	17/170	7/170	19/125

各欄の右側の数字がその年代の回答者数。その母数が小さいのであまり参考にならないデータではあるが、70代以上では、「無くしたい」より「大切に守りたい」という回答が多く、それより下の世代では「無くしたい」という回答が若干多くなる。補足としてグループインタビューでのコメント(要約)を挙げる。

【子育て世代】

◎おべっかは、昔は他に楽しみがない時代の親睦の会だった。無くさなくて良いと思うが、強制のような雰囲気になり、子供たちが「この地域は面倒くさいから外に出たい」と思うようにならないようにしたい。◎昔から続く寄合や葬儀のしきたりは、負担感だけが増して、それを続ける意味が継承されていない、若い世代はわからなくなっているのではないか。◎女性の集まりは、昔は家に縛られていた嫁が理由をつけて外に出て、いろいろ話せて気晴らしになる機会だったと聞いている。今はその役割の1つにSNSなどがある。◎集まりは、コミュニケーションをとる唯一の場。何もないと、昔と違って町場と同じようになってしまう。コミュニケーションが取れないと、こういう田舎ほど大変なことになる。

【50代60代】

◎寄合は、ふだん話せないこともいろいろと話せてコミュニケーションをとり親睦を深めるのに良い機会。◎若い世代にはそれぞれの考え方があり強制はできない。◎若い世代にも参加してほしいが世代交代がなかなか難しい。

【70代80代】

◎葬式は、今はみんな葬儀会社が仕切る。昔のように、地域で葬式をやるということは、集落の中でコミュニケーションなどを覚えていく、一つの社交場のようなものだった。

(3) 生井地区の「新しい祭り」について

生井地区の青年部が中心となって、2012年(開始年は要確認)に立ち上げた「あんずっ子サマーフェスタ」の話題が、グループインタビューで語られていた。全自治会を繋ぎ、生井地区全体の祭りとして、8月に下生井小学校の校庭で開催してきたとのこと。各グループで語られたコメントをまとめる。

【子育て世代】

◎生井は、自治会ごとの祭りはあるが、間々田の蛇

祭りのように共通の祭りがなかった。◎自治会をつないで生まれた「あんずっ子サマーフェスタ」は貴重。◎けっこう年配の方も来てくれるが交通手段がなくて行きたいけど行けないという声も聞く。◎東京に出て行った人、地域外にお嫁に行った人なども、同窓会のような感覚で来る。◎年に1回あの祭りに行くと懐かしい地元の仲間に会えるという場所にした。

【農業従事者】

◎世代によって人数やまとまり方が違う。自治会同士の対抗意識が強かった世代や、人数が多い世代では、四つの地区をまとめて一緒に何かやろうという発想は難しかったが、若い世代が四自治会に声かけて夏に小学校の校庭でお祭りをしてくれている。◎「あんずっ子サマーフェスタ」の世代は、人数が少なくまとまりやすい。ただ、そういう繋がりがずっと継続できるかという点と難しい。年齢や時代が変わると変化することも。地域でいい繋がりができて人間関係で動いていけたら継続の可能性はある。◎地域で誰か頭になってやる人がいれば地域は変わる。結局は人だ。

【50代60代】

◎10年ぐらい前から、若い人たちが中心になって、「あんずっ子サマーフェスタ」が、地区全体で始まった。見事だ。素晴らしいことだ。◎本当に賑やかで、あれが、本当のお祭り。子どもたちも楽しみにしている。

【風景社コメント】

「あんずっ子サマーフェスタ」は、単なる催事やイベントではなく、世代や自治会を超えて地域を繋ぎ直す、生井地区の新しい交流の場となっている。古くから受け継がれてきた地域の寄合や祭りのスタイルは、時代の流れに沿って変化し、廃れていくこともあるかもしれないが、そこに地域の人々が求める「親睦」「コミュニケーション」「地域の絆を保つ」場を作るということは、世代や時代によって形は変わっても、生井地区ではし

っかりと受け継がれていくと感じる。

6：暮らす上で大切にしている価値観について

何に価値をおいて生活されているか、どんなことに生活の喜びを見出しているか、どんな生き方を望まれているか、そのようなことが読み取れるコメント（要約）を記載する。

(1) 豊かな自然の中で子どもたちの感受性が育まれること。それを実感する親子で過ごす時間と、その時の子どもの会話。

◎通学の送り迎いで自然の中を子どもと一緒に過ごす時間は貴重であり癒される。子どもは、季節による風景の変化に敏感で、感性豊かなことを話す。冬になると（よく見えるので）「そろそろ富士山の季節だね」。霽（もや）が出た日は「今日は、雲の上を歩いているね」。「コウノトリが飛んでくるのは、田んぼに水が入ってからだよ」「だんだん麦が金色になってきた」など。◎私は地区外から来たが、生井で育っている子どもたちは自然への感性と言葉が豊か。歩いていて目にする稲の色に「あ、変わってきたね。秋になるのかな」。「飛んでいるトンボが変わったね」「カエルが生まれたんだね、これから雨が降るのかな」など。

(2) 恵まれた自然環境の中で生活できることをもっと楽しむこと。あくせくしないで暮らす。

◎遊水地があって、広い田園が広がって、途中からコウノトリがお友達になって、せっかくこんな面白い地域に住んでいるのに、若い頃のように「金金金金」で、そんなことを追いかけている生き方ではしょうがない。最近では、もっと生活を楽しむ、生きるということに喜びを感じるようにしたい。そうでないと、何のためにこんないいところに暮らしているのか分からなくなってしまう。

(3) 先人たちが残してくれた史跡や、そこを守る取組みを引き継いでいくこと。

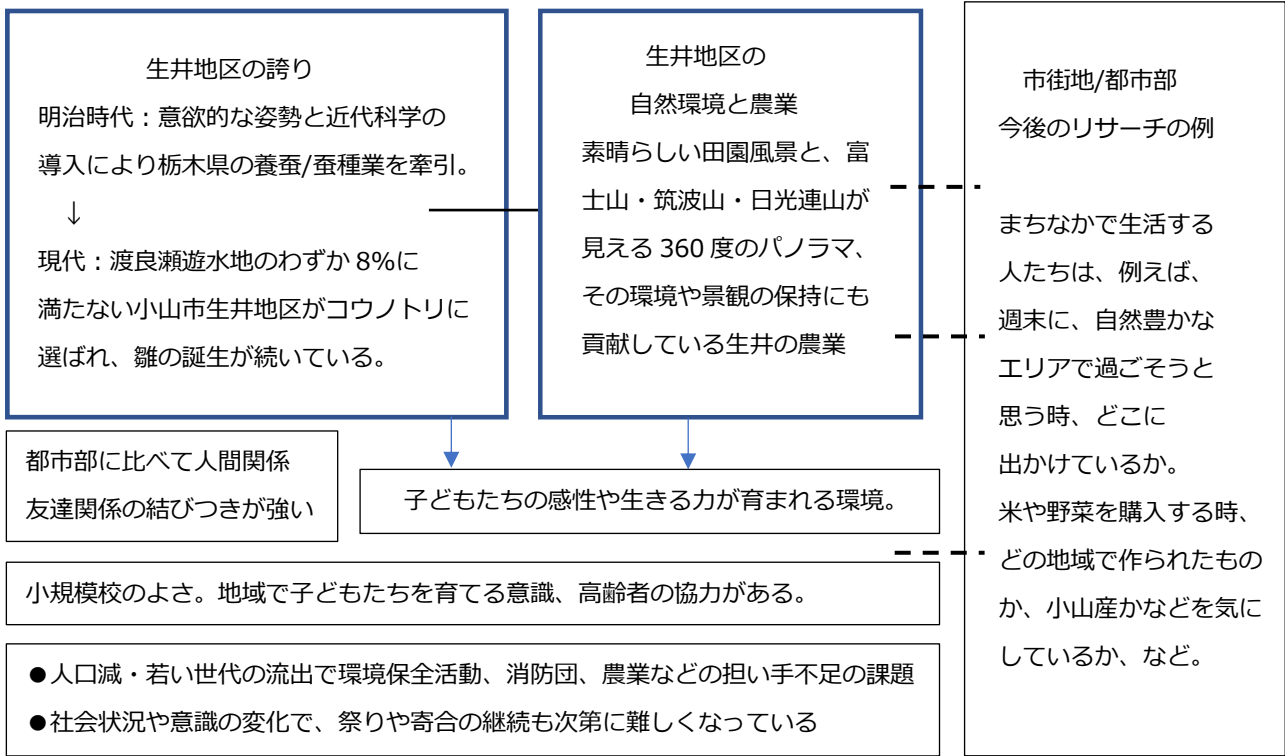
◎例えば、小谷城跡。守りたい、残したい史跡だから、草刈りなどを続けている。人手が足りなくて困って入るが。

(4) 家族、職場、隣近所、地域で、仲良く円満な関係を保つこと。

◎お父さんとお母さんを中心に、隣近所の人と仲良くやるべきで、それを子供たちにも見せておくことが大事。親が隣の人とけんかしていれば、息子も嫁さんも隣の人と話さなくなってしまう。仲がいいことにはなんの問題もない。うちでは、それを細々と大事にしている。◎基本は隣近所で仲良くすること。ここの生井は、隣が野木、こちらが栃木、藤岡。その地域も仲良く、従業員も職員も仲良く。そうでないと身動きが取れない。家族、地域、職員同士が仲良くやれば、今以上に盛り上がる地域になると思う。

4-4 持続可能な田園環境都市ビジョンへの手がかかり

簡易社会調査報告の最後に、生井地区の主な特性をまとめ、生井地区に暮らす方々の視点と声から、田園地帯と都市部の調和のとれた持続可能な小山市のまちづくりへの手のかかりの整理を試みる。



【風景社コメント】

生井地区にあって都市部にはないもの。生井地区が困っている課題。それらを関連付け、組み合わせながら、田園地帯と都市部の新しい関わり合いの在り方・仕組みづくりの可能性を探ってゆくことが必要と考える。そのヒントになると思われる住民の方々の声を次に記載する。

アンケート設問【7】都市部へのメッセージ

- ◎街でできない田畑仕事やってみたい人一緒にどうですか？
- ◎家庭菜園をやりたい人に土地を貸しますよ！

- ◎農業体験から学ぶ衣食住の有難さ、春夏秋冬から始まる事前作業の重要性の体験を
- ◎収入は少ないけど、自然豊かですよ。
- ◎私は農家ではありませんが農家のみなさんや農作物も国の大切な財産だと思っているので同じ小山市の住民として、そのことを大切に思ってくださいだけで幸いです。
- ◎生井のグリーンパワーをあびにきてほしい。

グループインタビュー（農業従事者）のコメントより

- ◎後継がない農地は、建物とセットにして無償で提供して、農業をやってくれる人を探す。マッチングする。地元の人ではなくて、生井地区外で、生井の良いところもアピールして、就

職したい人を探すほうが良い。

◎実際に近隣の地区の人で、(非農家で会社員とかで) 農業をやってみたいという希望があって、土日などに畑の片付けとか収穫とかパートで手伝ってくれている人もいる。

◎次でどうしていくか?が大事。世の中は、自然環境がどうの、食料自給がどうのなんて言い始めているが、農家だけではなく、非農家(消費者)も、今後は、農業をどう見ていくかが大切になる。

グループインタビュー(70代80代)のコメントより

◎子どもの教育にも力を入れたい。交流館を作ってもらって、人は来ているが、ほとんどが年寄りのようだ、もう少し大きくした研修施設みたいなところを作って、地域の年寄りが子供たちに遊び方でも教える機会をつくるとか、夏休みなどに、都市部(小山の都市部や首都圏)との交流の自然塾などができないか。施設と遊水地を利用しながら、を利用しながら、それが地域の盛り上がりにもつながればいい。

アンケート設問【3】、コウノトリ交流館の活用提案

◎都内との交流の場をたくさん受け入れ、過疎化対策の一環として魅力ある生井地区に有効に取り入れてみたいですね。

IV 結び

1 調査について

本調査は、地域の風土性に着目して、小山市における持続可能な社会の実現に向けた基礎資料パイロット版の作成を目的に、踏査、簡易社会調査（聞き取り調査、アンケート調査）、文献調査を組み合わせて行った。

2 結果

本報告書を基礎資料パイロット版として、Ⅱ章で踏査と文献調査の結果を、Ⅲ章で簡易社会調査2種の結果を報告した。

3 考察

生井地区の風土性については、ごく基本的に次のように考えられる。当地区は、小山市の都市部が位置する宝木台地の西側に、足尾山地を源流域とする思川、巴波川が同山地を削り、土砂を運び下ろし、流れを変え洪水を起こしながら大きくは平らに積もらせてできた思川低地に立地する。

宝木台地は、かつては内海や河川、湿地が広がった関東平野において古代より陸上交通の要衝とされ、また、現在の小山市周辺では、渡良瀬川、巴波川、思川、鬼怒川が河川交通に用いられ、ことに宝木台地西縁を挟んで日光街道と思川が平行し、生井地区の網戸と対岸の間々田地区の乙女にもうけられた河岸までは河床勾配が緩やかで、比較的大型の運搬船の起終点とされたことなどから、明治時代に鉄道輸送が主流になるまで、生井地区は河川交通の物流拠点の一つとして栄えた。

生井地区では、江戸時代から伝統的な養蚕技術

が継承され、明治時代からは近代科学に基づく新しい技術が積極的に導入されて養蚕業が発展した時期があった。その根本には、地形も関係している。思川低地においても一般的な河川低地と同じく川沿いに土砂が連続して堆積し、微高地（自然堤防）がかたちづくられている。しかし、小山市北部では思川と巴波川の間隔が空き、川沿いを除いて微高地は分散し、むしろ湿地が広がって水田稲作中心の農村が形成されたのに対し、南部の生井地区では思川と巴波川が迫り、連続する微高地の面積が占める割合が湿地に比べて大きくなり、人々は微高地の上に集落を構える他に畑や桑園をつくるに至った。また、河川では、交通や利水の他に漁業も行われた。

このように当地の基本地形、環境条件に依拠して、地区の生業・産業の基盤は成り立ったが、集落は微高地上にあるとはいえ、洪水に際して浸水被害に遭うこともあった。そのために、生井地区では輪中堤に代表されるように堤防を築き、冬期に北西の山地から吹き下ろす冷たく強い風、「おろし」への備えと兼ねて、敷地に入り込む水流の勢いをやわらげる樹林帯をもうけ、これに生垣を組み合わせ、敷地内に土を盛った上へ避難、食料の備蓄、作物の保護に使う小屋を建てる「水塚」を用意し、水害時の移動に用いる揚舟を納屋の天井へ吊るなど、幾つもの手段を複合的に講じてきた。

小山市教育委員会が1994年に発行した思川の自然調査委員会『都市の清流…思川を歩く』には、こうした自然と人間の関係の歴史の結果である現在の思川低地を「川の力と人間の力の見事な合作で生まれてきた平らな広々とした低地」と書き表している。生井地区では、この低地の中であって、おおむねかつての川の流れに沿って細長く伸びた微高地（自然堤防）の上に家屋が並び、風害と水害への防備を兼ねた木々がそれを覆い、各集落は

緑の帯のように見える。ここには、水域と陸上およびこれらの移行帯があり、そのような条件が揃うことを必要とする両生類を例に挙げれば、生井地区を含む調査範囲メッシュで、栃木県が絶滅危惧Ⅱ類に指定するアカハライモリ、準絶滅危惧種に指定するアズマヒキガエル、トウキョウダルマガエル、ニホンアカガエルの分布が確認されている。いずれも生態系の中間捕食者であり、隣接する渡良瀬遊水地を中心に生息する鳥類のうち、サシバをはじめとしたチュウヒ、ハイイロチュウヒ、ノスリなどの猛禽類やコウノトリといった高次捕食者に採餌の対象とされる。

こうした地勢に基づく風土の原型が、生井地区では現在もとどめられていると考えられる。しかし、近代以降の経済、社会の状況の変化の影響をさまざまに受けるなどしながら、当地区も変わりつつある。例えば、漁具や揚舟の製作に見られた地域の再生可能な自然資源の循環・持続利用技術は、「辻固め」などの祭礼に用いる設え（ごく簡潔な構成を持つものであるが）などを除いて用いられなくなっている。思川、巴波川の付け替えに始まり、環境の変化によって継続できなくなった生業があり、石油由来の資材が普及し、ここでも人間の経済活動が物質循環から逸脱してきた結果と考えられる。

そのような中で、地区に暮らす人々が現状をどうとらえ、どのような意識を持つかについては、Ⅲ章で、調査結果の記述に続けて「調査結果の再整理と考察」としてまとめられている通りである（55-63 ページを参照）。

4 課題

風土は、厳密には、自然に人が働きかけてできる物理的環境そのものだけでなく、当地の人々がそれをあるところまで共に同様に観る、身近な世界の一つの像と考えられている。そして、地域が

今なぜそうあるかに関した興味や理解は、地理、生態、歴史、民俗、社会などについての知識を持っているか否かによって深まる。したがって、本報告書の内容が説明されることで、人々の自ら暮らす地区の見方も変わり、地区の将来のあり方を話し合うにも基礎となる認識、知識が違ってくる。

今後は、地区の風土性の理解を暮らし手とともに進めながら（Ⅲ章の簡易社会調査からわかる地域社会の現状の理解を合わせて）、地域的な風土の成り立ちに則した生井地区なりの将来構想、そして「田園環境都市 小山」の具現化への加わり方が議論できてゆくといよいのではなかろうか。

また、生井地区の将来の構想にあたっては、今後行われる他地区の風土性調査の結果を共有し、比較を通して、特に、都市部との関係性をどのように結び直してゆけるとよいか模索することも有効であると考えられる。Ⅲ章の簡易社会調査でも把握できたように、生井地区は、どの地域でもそうであるように世代間の意識の差はあるものの、総じて人と人の結びつきが強く、世代間で相互に思いやるコミュニティのよさが保たれている。それゆえ、人口減少や担い手不足の課題があるとはいえ（それを逆転させてゆく発想ではなく）、「都市と田園の調和のとれた」市域全体の構想の中で、生井地区から、人口減少の時代に適った新しい相互扶助のあり方を提示できてゆく可能性もあると考えられる。

参考・引用文献

本報告書を作成するにあたり引用した文献を中心に、小山市、生井地区の地域調査・研究を行う上で参考となると思われる文献をまとめる。文献は、作業の中で主にどの分野の情報を得るために用いたかに基づき、仮に項目を分けて整理した。

1 風土の定義

園田稔編『神道』弘文堂、1988年

アルフレッド・シュッツ、トーマス・ルックマン『生活世界の構造』那須壽監訳、筑摩書房、2015年

思川の自然調査委員会『都市の清流…思川を歩く』（小山市教育委員会、1994年

和辻哲郎『風土—人間学的考察』岩波書店、1979年

オギュスタン・ベルク『風土の日本—自然と文化の通態』篠田勝英訳、筑摩書房、1988年

廣重剛史『意味としての自然—防潮林づくりから考える社会哲学』勁草書房、2018年

廣瀬俊介「風土形成の一環となる環境デザインについて：人文科学における研究成果の参照による風土概念検討を通して」『景観生態学』21(1)、日本景観生態学会、2016年、15-21頁
<https://doi.org/10.5738/jale.21.15>

2 地質・地形

小山こどもの森 | 地形の成り立ち | 低地性扇状地と三角州
<http://www3.oyama-tcg.ed.jp/~shimonamai/kotyositu/chikei.html>

金森定敏「思川の地形と生物」小山市史編さん専門委員会編『小山市史研究』6、小山市教育委員会市史編さん室、1984年、25-36頁

「栃木の自然」編集委員会編『栃木の自然をたずねて』築地書館、1997年

須貝 俊彦・松島(大上) 紘子・水野 清秀「過去 40 万年間の関東平野の地形発達史—地殻変動と氷河性海水準変動の関わりを中心に—」『地学雑誌』122(6)、公益社団法人東京地学協会、2013年、921-948頁
<https://doi.org/10.5026/jgeography.122.921>

貝塚爽平ほか編『日本の地形 4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会、2000年

田辺晋「関東平野中央部における沖積層の基盤地形」『地質学雑誌』127(10)、日本地質学会、2021年、635-648頁
<https://doi.org/10.5575/geosoc.2021.0019>

国土地理院 | 地理院地図
<https://maps.gsi.go.jp>

国土地理院 | 空中写真閲覧サービス
<https://geolib.gsi.go.jp>

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター | 地質 Navi
<https://gbank.gsj.jp/geonavi/>

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 | 日本土壌インベントリー
<https://soil-inventory.rad.naro.go.jp/>

3 気候

小山市教育研究所編『小山の自然と社会』小山市教育委員

会、1965年

五十嵐典夫ほか『益子の歴史』益子町、1983年

気象庁 | 過去の気象データ検索

<https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>

4 生物と生態系

栃木県 | レッドデータとちぎ WEB

<http://tochigi-rdb.jp/>

木嶋利男「ネギ属植物や雑草との間・混作による作物病害の防除」『雑草研究』56(1)、日本雑草学会、2011年、14-18頁

<https://doi.org/10.3719/weed.56.14>

東淳樹「農村が育む鳥類」『農村計画学会誌』35(4)、農村計画学会、2017年、477-481頁

<https://doi.org/10.2750/arp.35.477>

平野敏明「サシバは大きな獲物を巣へ運ぶか」『山階鳥類学雑誌』36(1)、公益財団法人 山階鳥類研究所、2004年、83-86頁

<https://doi.org/10.3312/jyio.36.83>

関東エコロジカル・ネットワーク推進協議会「関東地域におけるコウノトリ・トキを指標とした生態系ネットワーク形成基本計画」2016

https://www.ktr.mlit.go.jp/ktr_content/content/000743631.pdf

環境省 | 生物多様性センター | 自然環境調査 Web-GIS

<https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>

5 地形と陸上・河川交通

阿部昭、橋本澄朗、千田孝明、大嶽浩良『栃木県の歴史』山川出版社、1998年

『第123回企画展 下野の鎌倉街道』栃木県立博物館、2019年

小山市指定文化財（有形文化財-歴史資料）「下生井の道標」案内板

奥田久『内陸水路の歴史地理学的研究 - 近世下野国の場合』大明堂、1977年

奥田久監修『栃木の水路』栃木県文化協会、1979年

6 古墳

「シリーズ 郷土小山の古墳を巡る (2) 思川西岸の低地に築かれた古墳 (2)」小山市立博物館、1994年

7 漁業

栃木県立郷土資料館編『下野の漁撈習俗』栃木県教育委員会、1975年

8 養蚕とその他の農業

『栃木県下都賀郡誌（復刻版）』千秋社、2004年（「下都賀郡小誌」「下都賀郡制誌」を合本収録）

小山市史編さん専門委員会編『小山市史 通史編 III 近現代』小山市、1987年

村上直「近世における小山市域の諸村の様相について」小山市史編さん専門委員会編『小山市史研究』2、小山市企画部市史編さん室、1979年、26-47頁

鈴木芳行「明治期における下都賀郡小山地区の養蚕業の位置 - 生井村蚕種業を中心に -」小山市史編さん専門委員会編『小山市史研究』2、小山市企画部市史編さん室、1979年、48-69頁

「第70回企画展 碓井要作：田中正造とともに歩んだ蚕種家」小山市立博物館、2018年

「あんずっ子一下生井小学校だより」新春特別号、小山市立下生井小学校、2013年

9 信仰・祭礼

藤岡町古文書研究会「洪水常襲地域における水神信仰と水防意識の実態調査・研究報告書」2007年

松田俊介「祭礼をめぐる情報の表象と解釈：栃木県小山市における頭屋行事・『白鳥地区古式祭礼』の事例から」『生活学論叢』14、日本生活学会、2009年、62-75頁

https://doi.org/10.24528/lifology.14.0_62

松井圭介、卯田卓矢「近世期における富士山信仰とツーリズム」『地学雑誌』124(6)、東京地学協会、2015年、895-915頁

<https://doi.org/10.5026/jgeography.124.895>

10 民俗

小山市史編さん専門委員会編『小山市史 民俗編』小山市、1978年

小山こどもの森 | 渡良瀬遊水地学習コーナー | 地域の暮らし (民俗) 2021年

<http://www3.oyama-tcg.ed.jp/~shimonamai/kotyositu/chikei.html>

11 水害防備

小松裕『田中正造—未来を紡ぐ思想人』岩波書店、2013年

「水害から命を守る盛り土—とちぎ豊穰記 水塚・揚舟 (小山市生井地区)」『読売新聞』2021年6月15日号

渡邊裕之ほか『水屋・水塚—水防の知恵と住まい』LIXIL

出版、2016年

12 地名

菅間久男『小山市の地名由来と歴史』随想舎、2006年

13 生井地区郷土誌

『ふるさと下生井 歴史の散歩道』小山市立下生井小学校、1994年

サークルわかば『なまいのくらし』2000年

『ふるさとなまい抄—古老からのメッセージ』（小山市立生井公民館、1992年

下生井小学校郷土クラブ『私たちのふる里 しもなまい風土記』（小山市立下生井小学校、1986年

『江戸期における思川・巴波川の舟運と河岸』（阿部康夫氏—上生井在住—所蔵。私家本）

小山市生井地区 持続可能なまちづくりに向けた
地域調査 基礎資料

2022年3月

小山市